静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第169集

韮山城跡 II

平成17年度静岡県立韮山高等学校夜間照明施設工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第169集

韮山城跡 Ⅱ

平成17年度静岡県立韮山高等学校夜間照明施設工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００６

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

静岡県教育委員会では、各県立学校の校舎・付属施設の整備を例年にわたって行っており、平成17年度においては、県東部有数の伝統校である県立韮山高校のグラウンド整備の一環として夜間照明施設の設置工事を行うことになった。

この韮山高校の位置する箇所は、周知の韮山城跡にあたる。韮山城跡は戦国時代の城郭遺跡として県内でも最も著名な遺跡の一つである。過去において、伊豆の国市（旧韮山町）教育委員会、静岡県教育委員会のほか、本研究所による調査も平成７年度に行われている。

この時の調査では弥生～古墳時代の集落の検出が主となったが、戦国時代のものと思われる石積み遺構の発見もあり、大きな成果を得ることができた。

今回の韮山城跡の調査地点は、上に述べた当研究所による平成７年度の調査地点の南、校舎建築に先立って行われた、平成２年度の県教育委員会文化課による調査地点と隣接した箇所である。この県教委調査地点では、弥生～古墳時代の遺構・遺物とともに、韮山城関連と思われる遺構が発見された。ここで検出された比較的大きな堀跡は、江戸時代寛政年間の古地図に描かれた韮山古城の「中堀」・「外堀」に比定されている。

今年度の調査は、照明設備設置箇所のみの調査であり、面積的には、ささやかな調査であったが、面積に比して大きな調査成果が得られた。まずグラウンド南端部の調査区から検出された堀は、平成２年度に検出された「中堀」の推定延長上に位置し、「中堀」の範囲がここまで延びていることが明確になった。また、本遺跡で初めて報告される石組み井戸も発見された。戦国時代～近世のものと推定され、この時期の石組み井戸に一事例を加えることになった。

最後になるが、調査と報告書作成にあたっては、静岡県教育委員会財務課、文化課、県立韮山高等学校には多大なるご配慮を頂いた。ここに厚く御礼申し上げたい。また、狭小かつ深い調査区の中で現地作業に従事した方々の労をねぎらいたい。

2006年３月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　長　　斎　藤　　忠

例　　言

1　本書は、静岡県伊豆の国市韮山韮山229に所在する韮山城跡（にらやまじょうあと）の発掘調査報告書である。書名については平成８年度に当研究所が『韮山城跡・韮山城内遺跡』を刊行しているため、本報告書は「韮山城跡Ⅱ」とした。

2　本調査は県立韮山高等学校夜間照明設備建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県教育委員会事務局財務課の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

3　現地調査は平成17年10月～11月に実施し、資料整理を平成18年１月に行った。

4　調査の体制は次のとおりである。

所長　斎藤　忠　　常務理事兼総務部長　平松公夫

総務部次長兼総務課長　鈴木大二郎　　事業係長　野島尚紀

調査研究部長　石川素久　　調査研究部次長兼二課長　佐野五十三

調査研究員　片桐英生　木崎道昭

5　本書の執筆は当研究所職員が以下のとおり分担した。また執筆者名は文末にも記載した。

第１・２章、４章２節、第５章　木崎道昭

第３章　片桐英生・木村忠義（本研究所技術員）

第４章１節　木村忠義

6　遺物写真撮影は当研究所職員が行った。また、木製品の保存処理は当研究所保存処理室が行った。

7　本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

8　発掘調査にかかる出土品及び記録資料については、静岡県教育委員会文化課が保管している。

凡　　例

本書の記述については、以下の基準に従い、統一をはかった。

1　本書で使用した方位はすべて世界測地系による公共座標系の方位である。

2　写真図版中の遺物の番号は本文・挿図の番号と同一である。

3　参考文献

⑴一覧表については第５章の文末に記す。

⑵本文中（　　）に記した引用・参考文献の表記の方法については、以下のように省略した。

○○○教育委員会→○○○教委

㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所→静文研

目　　次

序
例言・凡例
第１章　調査に至る経緯 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 1
　第１節　地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境 …… 1
第３章　調査の方法と経過 …… 5
　第１節　調査の方法 …… 5
　第２節　調査の経過 …… 5
第４章　調査の成果 …… 8
　第１節　各調査区の成果 …… 8
　第２節　遺物 …… 17
　　(1)土器・陶磁器・石器 …… 17
　　(2)木製品 …… 19
第５章　ま　と　め …… 22
引用・参考文献 …… 23
謝　　辞 …… 23

挿図目次

第１図　周辺遺跡図 …… 2
第２図　韮山城跡の過去の調査地点 …… 4
第３図　調査区設定図 …… 6
第４図　１―１区　平面図・土層断面図 …… 9
第５図　１―２区　平面図（堀の上面・基部） …… 10
第６図　１―２区　堀土層断面図 …… 11
第７図　１―３区　平面図・土層断面図 …… 12
第８図　１―４区　平面図・土層断面図、ピット平面図・断面図 …… 13
第９図　１―５区　平面図・土層断面図、井戸跡平面図・断面図 …… 14
第10図　２―１区　平面図・土層断面図 …… 15
第11図　２―２区　平面図・土層断面図 …… 16
第12図　２―３区　平面図・土層断面図 …… 16
第13図　出土遺物実測図①（土器・陶磁器・石器） …… 18
第14図　出土遺物実測図②（木製品） …… 20

挿表目次

第１表　遺跡地名表 …… 3
第２表　土器・陶磁器観察表 …… 19
第３表　木製品計測表 …… 21

写真図版目次

図版１　１　調査区近景（南西より）
　　２　調査区近景（北西より）
図版２　１　１－１区　北壁土層断面
　　２　１－３区　北壁土層断面
図版３　１　１－２区　中堀検出状況（南より）
　　２　１－２区　中堀解体状況（南より）
図版４　１　１－２区　中堀柱列基部検出状況（北より）
　　２　１－２区　中堀石積み検出状況（南より）
図版５　１　１－４区　北壁土層断面
　　２　１－４区　ピット検出状況（南より）
　　３　１－５区　井戸跡（SE１）検出状況（西より）
図版６　１－５区　井戸跡（SE１）断面（東より）
図版７　１　１－５区　井戸跡（SE１）中の井戸枠検出状況（東より）
　　２　２－１区　北壁土層断面
　　３　２－２区　北壁土層断面
図版８　１　２－２区　東壁土層断面
　　２　２－３区　南壁土層断面
　　３　２－５区　明治期校舎の石垣（西より）
図版９　出土土器・陶磁器
図版10　出土土器・陶磁器・石器
図版11　出土木製品

第１章　調査に至る経緯

静岡県教育委員会では、平成17年度事業として県立韮山高校グラウンドの夜間照明施設工事を計画した。そこで、平成16年10月に県教委財務課から文化課に同校内の埋蔵文化財の有無について照会があった。当該地が周知の遺跡である韮山城跡の範囲に含まれ、また、工事による掘削が埋蔵文化財確認面にまで及ぶことが判明したため、工事に際しては事前の発掘調査が必要であると回答した。

これにより文化課では平成16年の段階から、平成17年度事業に組み込んで財団法人静岡県文化財調査研究所（以下静文研と略）との調整を進めてきた。

平成17年９月に財務課から文化課宛てに調査依頼が届いたため、文化課が静文研に調査計画書の作成を依頼した。10月には財務課と静文研との間で調査の契約が結ばれ、同月に現地打ち合わせを行い、発掘調査箇所を確定した。あわせて調査に伴う工程等の打ち合わせを実施した。その後グラウンドへの資器材進入路の設定を行い、10月11日から現地調査を開始した。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

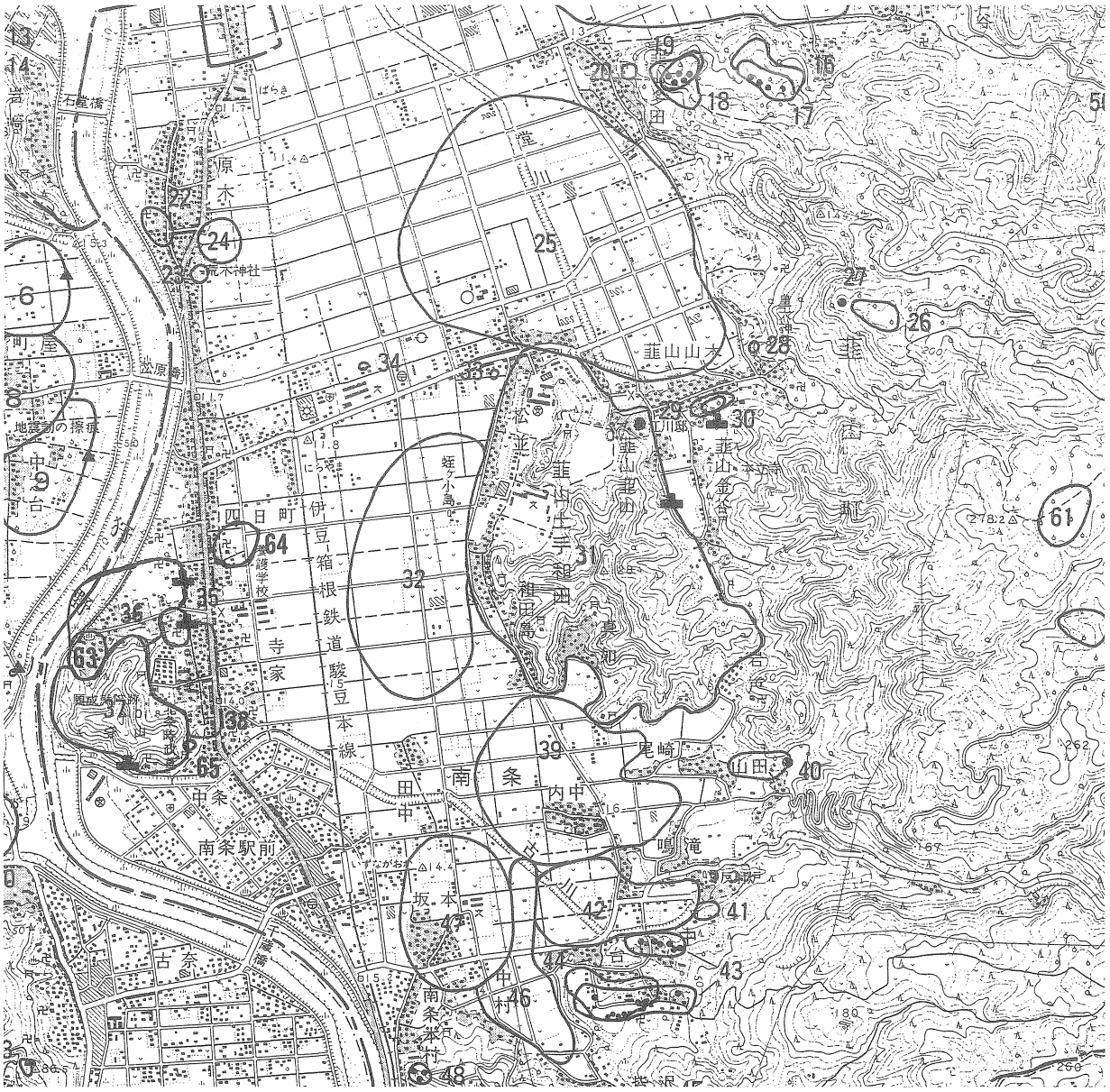
韮山城跡は、北伊豆の田方平野の東南寄りに位置する。田方平野は伊豆半島北部第一の河川である狩野川による沖積平野であり、多くの氾濫原や自然堤防が存在する。

今回の調査地点は静岡県立韮山高校のグラウンド部分であり、狩野川によって形成された後背湿地であるが、すぐ東側には南方から南北方向に伸びる丘陵（通称「龍城山」。最高所の標高は約50m）が存在し、さらにこの「龍城山」につながる形で東南側にはさらに一段高い丘陵である「天（てん）ヶ岳」（標高約128m）が存在する。ここから一段低くなりながら韮山峠に至る山地に接続する。韮山城跡はこの「天ヶ岳」・「龍城山」とその周辺の低地部分からなる。現在の狩野川の最も近接した箇所（「松原橋」付近）から今回の調査地点までの距離は、直線で約1,300mである。

第２節　歴史的環境

韮山城跡付近には旧石器時代から近世・近代に至る多数の遺跡が存在し、その中には重要な遺跡も少なくない。ただし本報告では紙数の関係もあり、本節では今回の調査に関連した時代（弥生後期～律令期、中世後期～近世）のみにほぼ限定して記述する。

本遺跡周辺の弥生～律令期の低地遺跡としては、学史的にも著名な山木遺跡（25）のほか蛭ヶ島遺跡(32)、内中遺跡（39）があり、若干南に離れた地点に坂本遺跡（47）、宮下遺跡（42）等が存在する。また、本遺跡の低地部分は大部分この時期の遺跡と考えられ、韮山高校のプール改修に伴なって本研究所によって「韮山城内遺跡」として発掘調査が行われ、報告書が刊行されている（静文研　1997）。それによれば、竪穴住居跡24軒、掘立柱建物跡13棟、溝状遺構、土器集中地点等が検出されている。それらの遺構のうち、竪穴住居跡と掘立柱建物跡の大部分は古墳時代前期に属するとされている。また、今回の調査地点であるグラウンドのすぐ北側は近年造られた普通教室棟であるが、この地点が静岡県教育委員会文化課により平成２年～３年にかけて調査され、報告書が刊行されている（静岡県教委　1992）。そこ



第１図　周辺遺跡図（(県教委　1988）を元にして文化課ホームページ「静岡県埋蔵文化財包蔵地情報管理サイト」で補正。第１表も同じ）（Ｓ＝1／25,000）

では、弥生中期～後期及び古墳前期～後期の土器が多量に出土している。また、調査地点の東端部からは多量の石と古墳中期～後期の土器が集中的に出土し、手捏土器・土馬・石製有孔円板等が伴出し、調査者はこの時期の祭祀遺構と推定している。今回の調査で出土した弥生～律令期の遺物のうち、グラウンドの造成土から出土したものもあり、全部が本遺跡のものとは言えないが、その内容から考えて本遺跡か周辺遺跡出土のものである可能性が高い。

本遺跡周辺には古墳も存在するが大部分は古墳時代後期の群集墳である。芋ヶ窪古墳群（17)、大塚古墳群（19)、太閤陣場古墳（27)、山田古墳群（40）等であり、該期の低地遺跡との関連が注目される。

中世～近世の本遺跡周辺は、今回報告する韮山城跡を中心として、注目すべきあり方を見せる。まず韮山城であるが、戦国時代における後北条氏の伊豆支配の拠点として、また戦国の争乱の舞台として歴史的価値が極めて高く、戦国時代の城郭として全国的にも著名である。韮山城跡の調査は過去において数度行われており、1997年以前の調査については本研究所による先述の報告書の中でまとめられている

第１表　遺跡地名表

番号	遺　跡　名	時　　代	種　　別	番号	遺　跡　名	時　　代	種　　別
16	芋ケ窪遺跡	縄文～古墳	散布地・その他の墓地	35	光照寺	中世、近世	城館
17	芋ケ窪古墳群	古墳	散布地・古墳	36	御所之内遺跡	弥生(後)～近世	その他
18	妹ケ久保遺跡	弥生、古墳	集落・古墳	37	守山(守山城)砦	中世	城館
19	大塚古墳群	古墳	古墳	38	願成就院跡	古墳～中世	その他の墓地・社寺跡
20	熊野神社	弥生～奈良	散布地・集落	39	内中遺跡	縄文～古墳	散布地・集落
22	原木下町遺跡	弥生	散布地	40	山田古墳群	古墳	古墳
23	荒木神社	古墳	散布地・その他	41	宮ノ後遺跡	縄文、弥生	散布地・集落
24	荒真木遺跡	古墳	散布地	42	宮下遺跡	弥生(後)、古墳	水田・その地
25	山木遺跡	弥生(後)、古墳(前)、平安～近現代	集落・水田・その他	43	台古墳群	古墳	古墳
26	滝之洞遺跡	縄文～古墳	散布地	44	長者ケ原(中ノ台)遺跡	旧石器～古墳、中世	散布地
27	太閤陣場古墳	古墳	古墳	46	皆沢低地遺跡	弥生、古墳	水田・その地
28	下向山遺跡	中世	その他の墓地	47	坂本遺跡	弥生～平安、近世	散布地・集落
29	山木下町(下町)遺跡	弥生、古墳	散布地	48	犬間洞古墳群	古墳	古墳
30	山木館	中世	城館	61	荒ク(荒久台)遺跡	縄文(早・中)	散布地
31	韮山城跡	弥生～中世	城館	63	北条氏邸跡	古墳、奈良、中世	城館
32	蛭ケ島(蛭ケ小島)遺跡	弥生、古墳	散布地・水田・その他	64	正念寺遺跡	古墳、中世	社寺跡・その他
33	兵衛ノ森遺跡	弥生、古墳	集落	65	満願寺跡	縄文～近世	社寺跡
34	道下遺跡	平安、中世	散布地・水田・その他				

ので、そこで記述されていることについては省略する（本研究所の97年の調査以降を含めた各調査地点については第２図を参照）。ここでは、今回の調査地点に隣接した新校舎部分の、県教委による調査成果の概略のみ述べる。

この時の調査では、該期の遺構として南北方向に走る２本の堀跡と園地状遺構、井戸跡、柱列跡等が検出された。調査者によれば、この時検出された堀跡のうち東側のものは、江川文庫所蔵「伊豆国田方郡韮山古城図」に見られる「御座敷」と記述される「郭」の外側を区画する堀であり、西側のものは「図」の「昔ハ深田ナルヘシ」と記述されている外側の堀に相当し、前者を「中堀」、後者を「外堀」と呼称している。今回の調査では、１－２区で検出した堀が「中堀」の南側延長部分に存在すると想定される。

周辺地域において後北条氏以前には、韮山城跡より西側の守山周辺に遺跡が集中する。御所之内遺跡(36）は、1457年（長禄元年）鎌倉公方として下向してきた足利政知が、鎌倉に入府できず御所を構えた場所であり、堀越公方として子の茶々丸に引き継がれたが、伊勢宗瑞（北条早雲）（註）により滅ぼされた。これにより早雲の伊豆制覇の第一歩が印されたわけである。御所之内遺跡の背後の守山は全域が中世の守山砦（城）である（37)。また山麓には伊豆の代表的寺院である願成就院跡（38）や光照寺（35）が所在し、後北条氏以前の韮山の中心地域であった推定できる。このうち御所之内遺跡と願成就院跡は韮山町教育委員会及び伊豆の国市教育委員会によって数次にわたる調査が行われており、多大な成果が得られている。

江戸時代にはこの地域は天領となり、代官江川氏の支配するところとなった。代官所でもある江川家住宅は城跡の東北側に隣接して現存し、国指定重要文化財に指定されている。幕末の代官江川英龍によって築造された反射炉も残されており。本遺跡周辺は近世韮山の中心地域であった。

（註）述べるまでも無いが、早雲は生前には北条氏を称してはいなかった。「北条早雲」は俗称であるが、広く知られているため、以下の記述では北条早雲を使用する。

（木崎道昭）

第２図　韮山城跡の過去の調査地点（（池谷　2005ａ）より引用）

第３章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

発掘調査は、夜間照明塔及びハンドボール用の配線工事に伴う部分に限定して行った。計画図面を基に、照明塔を設置する５箇所（５ｍ×５ｍ）を１区、配線工事に伴う部分５箇所（２ｍ×２ｍ）を２区として調査を実施した。工事にかかる掘削深度は、照明塔部分が2.5m、配線工事部分が1.5mとなっており、今回の発掘調査も下層には影響が及ばない点及び安全性の確保という点から原則として工事の計画高までとした。

今回の調査では調査区が点在するため、韮山高校全域を覆う10×10mのグリッドを設置して位置を示した。公共座標系（世界測地系　平面直角座標系）の（Ｘ、Ｙ）＝（－10484.000、41430.000）上を（Ａ―１）とし、Ｘ軸方向（南―北）をアルファベット、Ｙ軸方向（東―西）をアラビア数字で表記している。

平成２年度に実施された校舎建設に伴う発掘調査の成果や学校関係者への聞き取り調査から、明治期の校舎建設に伴う造成土やグラウンド拡張のための盛土が行われていたことが事前に判明していた。そこで、韮山城当時の造成土と考えられる青灰色砂質土上面を目標に、後世の造成土を重機（バックホウ）で除去した後、人力による掘削を行った。

実測図の作成及び遺物の取り上げにあたっては、㈱シン技術コンサルの「遺跡管理システム」を使用したが、遺構や土層断面の記録のために手実測による作図も行った。また、35㎜小型カメラを用いて、モノクロネガ、カラーリバーサル、カラーネガによる写真撮影を行った。

第２節　調査の経過

10月３日～７日

10月３日、静岡県教育委員会文化課、同財務課、都市住宅部設備室と調査計画等について最終的な打ち合わせを行い、翌４日より準備を開始した。７日までに仮事務所の設置、発掘用資器材の及び重機の搬入を終了した。対象箇所には埋設物が多数存在する可能性が高いため、調査を始める際に最初に重機を用いて埋設物の確認を行い、問題が無ければそのまま通常の調査を進めるという方針をたてた。

10月11日～14日

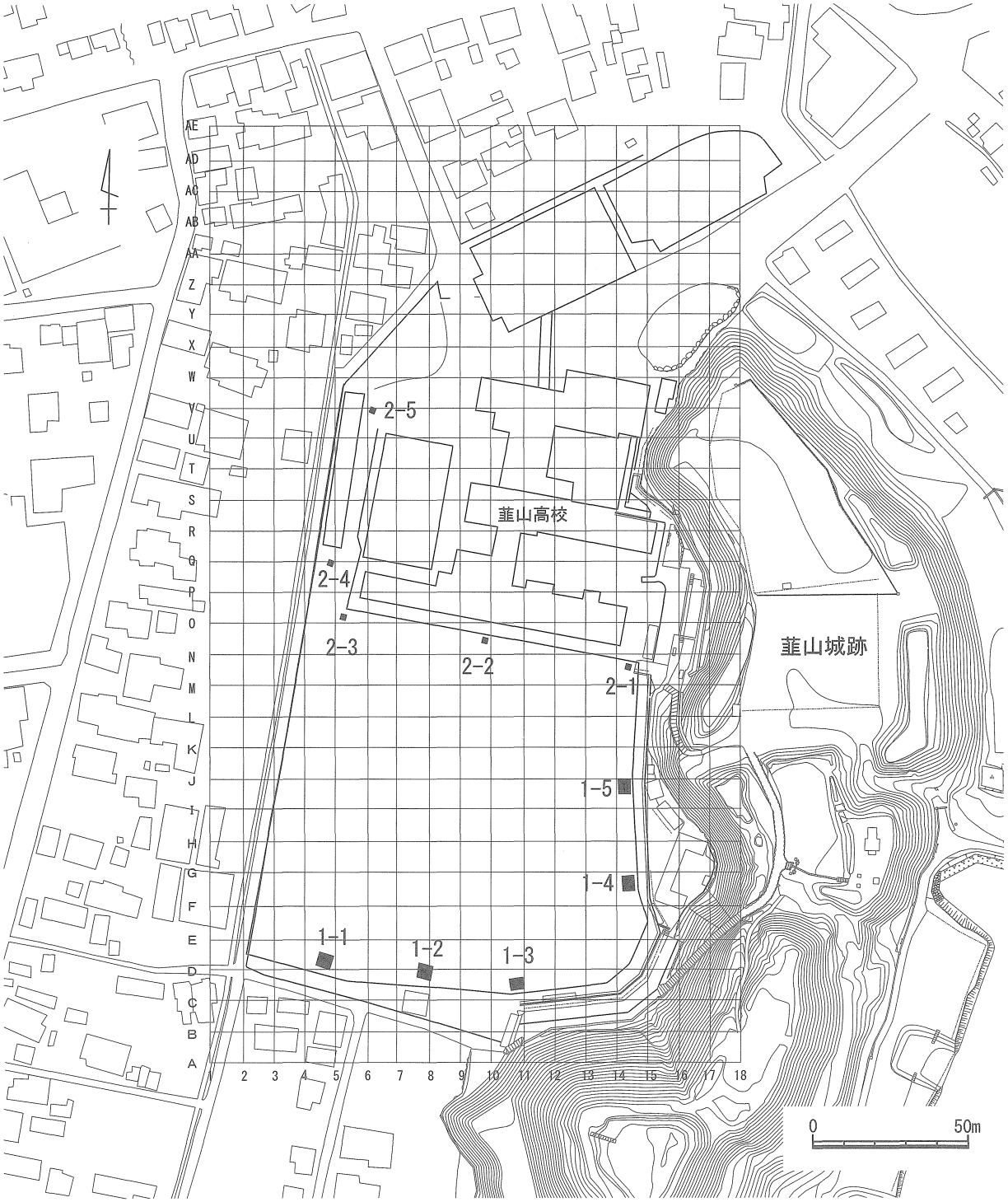
２区の校舎南側の３箇所から調査に着手。12日に測量杭４本の打設を行った。14日からは作業効率を上げるため２―４区、２―５区を除いた全ての調査区で調査を開始した。

10月17日～22日

２区の調査を重点的に進める。２―１区は、現在のグラウンド造成土の直下で砂質の岩盤を検出。２―２区では、後世のグラウンド改良工事及び水道管埋設時に上層の撹乱を受けていたが、下層は中堀の埋土と判断した。２―３区は、北東から南西に向かっての斜行堆積が認められたが、後世の造成土と判断し、水道管埋設深度まで掘り下げた。各区とも実測等の記録を終え、20日に埋め戻しを行い、２区３箇所の調査を終了した。

10月24日～29日

１区を中心に作業を進める。１―２区では、調査区中央に入れたトレンチの検討から中堀であることを確認した。１―３区ではグライ化した粘質土の層と韮山城当時の造成土と考えられる青灰色砂質土が交互に堆積していることを確認した。遺構の検出は無く、写真・土層断面図を作成し、10月28日に埋め



第３図　調査区設定図（Ｓ＝1／2,000）

戻しを行い、調査を終了した。１－５区では井戸のプランを確認、井戸内の掘削を進める。

29日には、２区の残り２箇所（２－４区、２－５区）の調査を行った。２－４区では、比較的浅い段階で埋設施設（温水管・通信線）を確認。また、２－５区では、明治期の校舎に伴うと考えられる石垣と学校拡張のための造成土を確認したため、両調査区とも写真での記録に止め、調査を終了した。

10月31日～11月４日

１区４箇所の調査を継続した。11月１日には、１－５区で検出した石組み井戸の深さが２ｍ以上になることから、安全確保のために井戸を半截、実測図等の作成を開始した。１－１区では校地拡張時の盛

土を除去し、下部に粘土層があることを確認、１－４区では１－３区と同様、粘土と城の造成土との互層が認められ、ピット１基を検出した。両調査区とも記録作成後、11月３日に埋め戻しを行い、調査を終了した。

11月７日～11日

１－２区では、中堀の覆土を除去、堀の肩部の解体を行う。８日には、内部から出土した角材を取り上げる。１－５区では、継続して井戸の記録作成を継続し、井戸枠の取り上げを行う。11日、各区ともに記録作成終了後、埋め戻しを行った。同日、プレハブ・安全フェンスの撤去も完了し、現地での全調査を終了した。

（片桐英生　木村忠義）

重機による造成土の除去（１－１区）

重機による舗装部分の除去（２－５区）

調査風景（１－２区）

井戸跡の調査（１－５区）

韮山高校生徒の現地見学（11月２日）

重機による埋め戻し状況（１－３区）

第４章　調査の成果

第１節　各調査区の成果

今回、調査の対象となったのは、第３章第１節で述べたように、校庭の縁辺部に設定された５ｍ×５ｍの照明塔用基礎５箇所と２ｍ×２ｍのハンドボール用配線５箇所であり、前者を１区、後者を２区とした。

広いグラウンドに狭小な調査区を設定して調査を実施した結果、各調査区の成果について、土の堆積状況を含め、かなりの相違が認められた。したがって、本節では各調査区について個別に報告を進めることとした。

韮山城の「御座敷」に該当すると考えられる韮山高校の校地については、南側校舎建て替えの際に調査が実施され、南北に延びる中堀、外堀等の遺構が検出されている（県教委　1992）。本調査区が、校舎の南側に位置するグラウンドを対象としていること、また、上述の理由で、狭小な調査区から遺構の全容を解明することが難しいことから、本調査の結果を報告するにあたっては、1990～91年の調査成果に依拠することとした。

１－１区（第４図　図版２－１）

Ｄ－４グリッド、グラウンドの南西隅に位置する。現地表面から③層まではグラウンド造成に係る整地がなされており、水道管が埋設されていた。⑨層以下は北－南方向、北東－南西方向に斜行堆積が認められたが、その内部からは、近現代の遺物が出土しており、近年造成されたものと考えられる。

造成土の下部には、水平に堆積する土が２層確認できた。上層（⑳層）は、粘性のあるグライ化した土、下層（㉑層）は黒色の砂質土である。後者には多量の木片が含まれていた。これらの状況は、本調査区がある時期湿地化していたことを示すものであり、位置からも外堀の内側である可能性が高い。

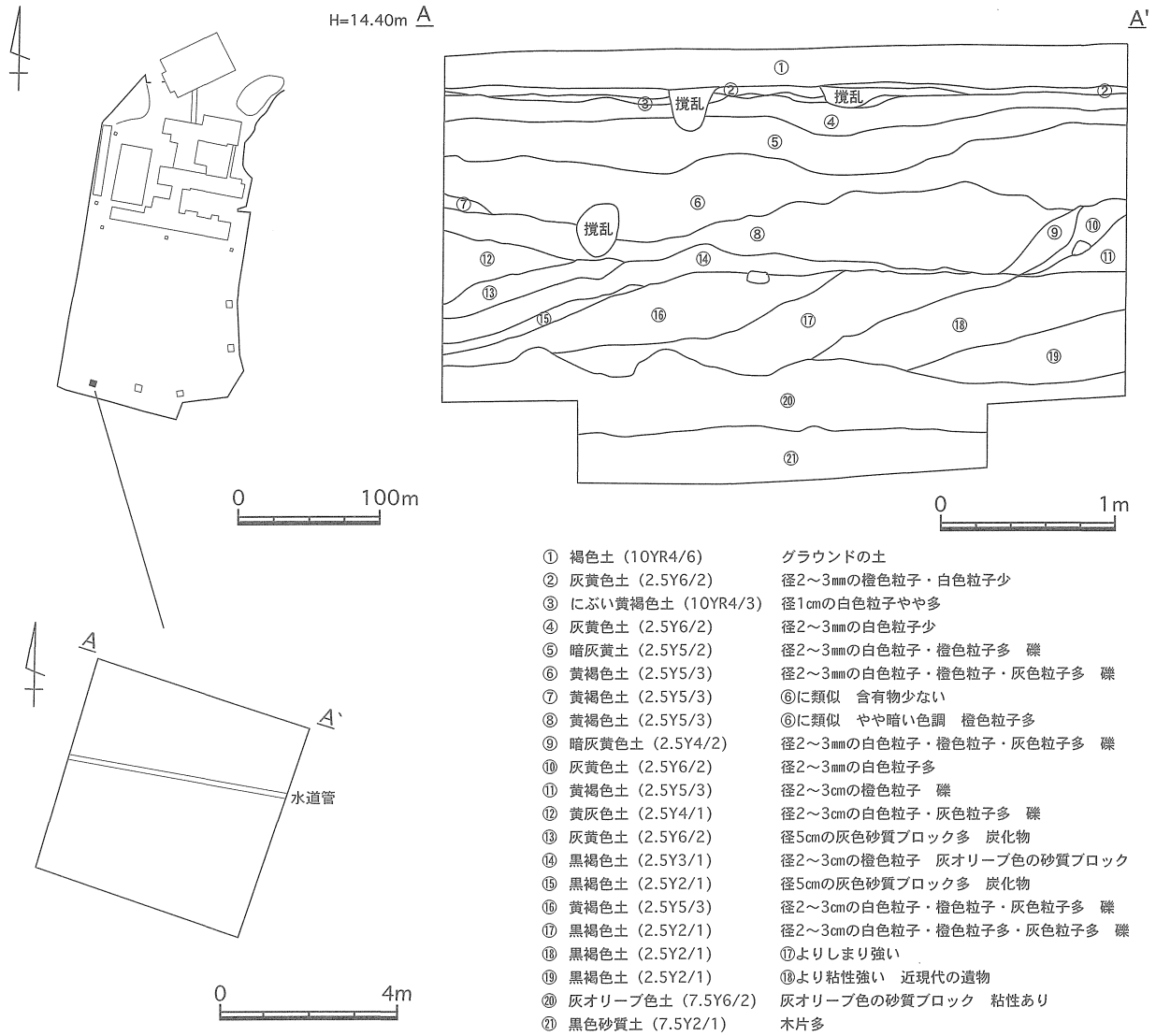
１－２区（第５・６図　図版３・４）

Ｃ－７・Ｃ－８・Ｄ－７・Ｄ－８グリッド、グラウンドの南側中央部に位置する。調査区中央部にトレンチを入れ、全体の堆積状況を把握した上で、平面的な調査を実施した。現地表面から約50cmまで、グラウンド整地土及び新しい造成土を確認した。

今回、トレンチを併用したことにより、堀（土塁）の構築順序を示すと考えられる落ち込みのラインを確認することができた。

平面的に確認できたものは第６図③のラインの堀である。調査区の東端から西に約２ｍの付近で確認できたもので、法面の傾斜は約35°、大きく２段のテラスを有しており、上から２段目のテラスの端部には、幅約20cm、深さ約10cmの溝が南北方向に掘られていた。溝の西側の壁に、直径約10cmの丸杭が溝に沿うように約20cmの間隔で打たれていた。溝部分には横木等が埋設していた可能性があり、「土留め」として機能したものであろう。さらに、この杭列の西側にも、直径５cmの丸杭が、ランダムに打たれていた（第５図　堀の上面）。

土塁内部には上端部幅約1.5m、底部幅50～60cm、深さ約1mの溝が南北方向に掘削されていた（第６図②ライン）。底部には長径約50～70cm、厚さ約20cmの平らな石が約90cmの間隔で４箇所据えられ、その間に径20～30cmの石が敷き詰められていた。平らな石の上には、東に約75°の傾きを有する、幅約23cm、現存長約1.54mを最大の大きさとする角柱状の材（第14図、第３表）が４本据えられていた。この溝あるいは角柱を挟んで東西の堆積状況が異なっている。西側には、不定形な大小の石が、約70cmの高さまで積まれている状況が確認され、それ以上は粗雑な積み方をしている。一方、東側では溝の上部に丁寧な

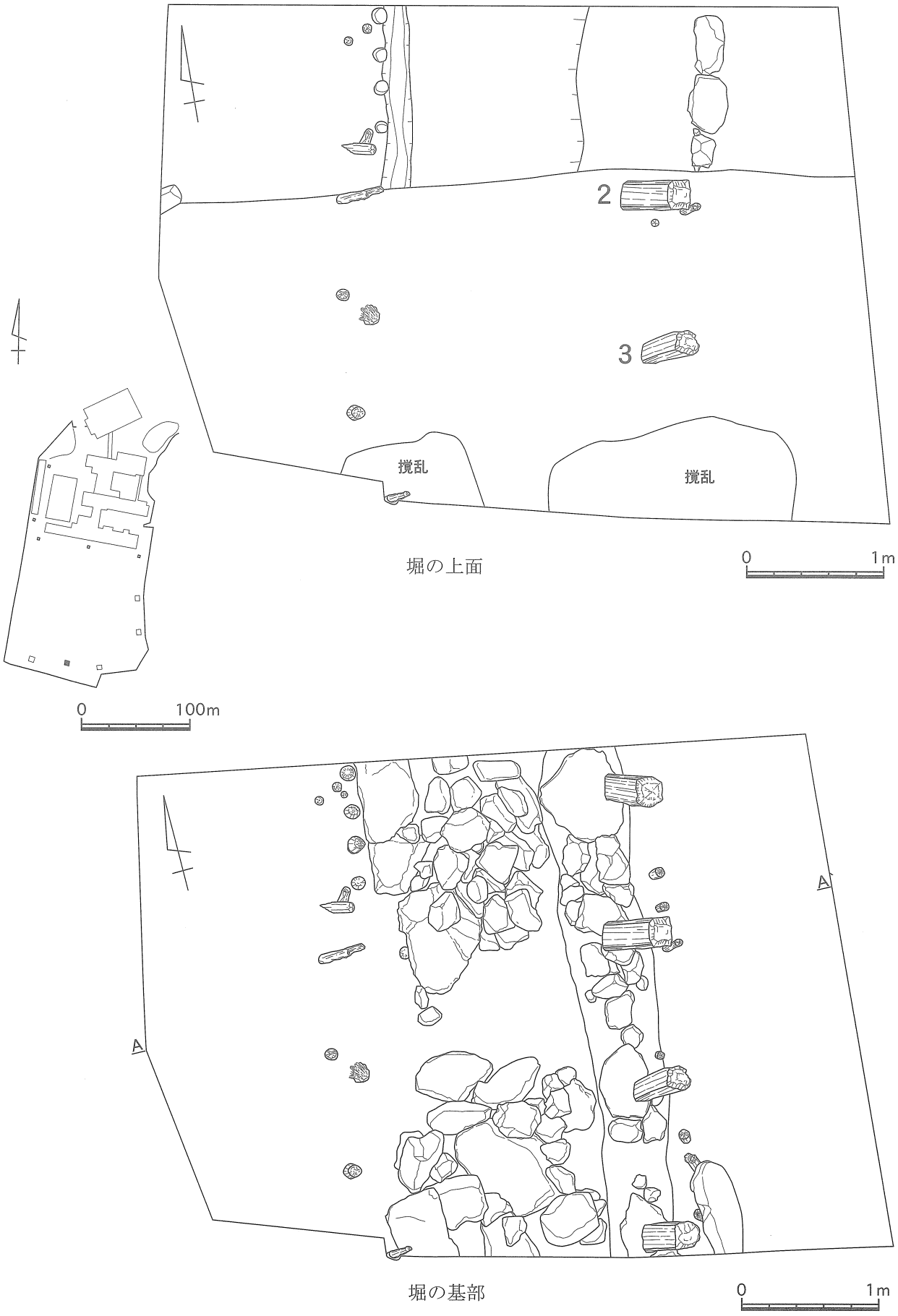


第４図　１－１区　平面図・土層断面図

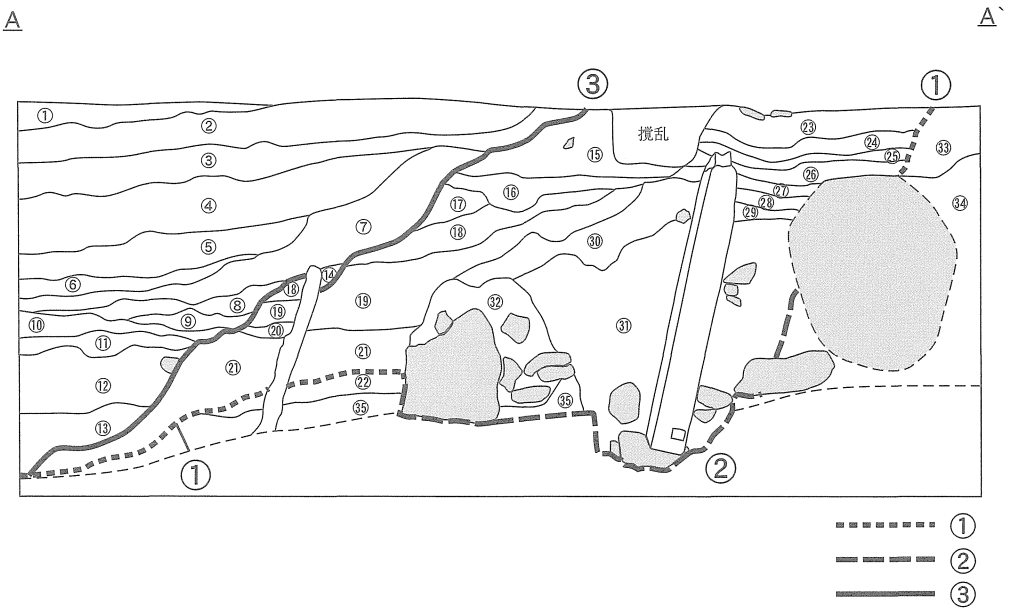
版築が認められた（㉓層～㉙層）。礎石によって角柱状の材が沈み込まないように考慮され、さらに版築による堅固な地業を行っていることから、角柱上部とその東側に何らかの構造物が存在した可能性がある。さらに、確認された版築の最上層には幅約20～30㎝、長さ約40㎝の石が南北方向に並んで確認され、石列の間からは漆器片が出土した。この石列については、上部の構造物に関連するものと考えたいが、石列の直上にグラウンド造成に係る盛土等がなされている点等から時期及び性格は不明としておきたい。

調査区西端部では、黒色砂（㉟層）の上部に青黒粘土（㉒層）を盛ることで堀（土塁）を成形している様子も認められた（第６図の①ライン）。この堀（土塁）は②ラインの掘り込みにより破壊されており、本来の形状は不明である。ただし、㉝層及び㉞層をこの造成に伴うものと考え、さらに㉞層内部の直径30～100㎝程の石を土塁強化のための造作とすれば、傾斜角20～25°の緩やかな堀（①ライン）が当初存在し、その後に③の堀へ改修された可能性も否定できない。

今回の調査では、中堀が改修された様相が窺われたが、調査面積も狭く決定的な判断は下せなかった。堀の構築時期は㉜層中の石積みの間から出土したかわらけ（第13図―11）の年代から、16世紀の古い段階と考えられる。



第５図　１－２区　平面図（堀の上面・基部）



① 褐色土（7.5YR4/4）
② 黄褐色土（10YR5/6）
③ 暗褐色土（10YR4/3）
④ にぶい黄褐色土（10YR4/3）　径2～3㎜の白色粒子多
⑤ にぶい黄褐色土（10YR4/3）　径2～3㎜の白色粒子少　橙色粒子多　炭化物
⑥ にぶい黄褐色土（10YR4/3）　径2～3㎜の白色粒子少　橙色粒子多　炭化物　⑤よりやや暗い
⑦ 黒褐色土（10YR3/2）　径1～2cmの白色粒子　径5㎜の橙色粒子　炭化物
⑧ 褐灰色土（10YR4/1）　径2～3㎜の橙色粒子　炭化物　やや砂質
⑨ 褐灰色粘質土（10YR4/1）　径2～3cmの白色粒子　径3～5cmの橙色粒子多
⑩ 褐灰色粘質土（10YR4/1）　径2～3cmの白色粒子　径3～5cmの橙色粒子多　炭化物　砂粒多
⑪ 褐灰色砂質土（10YR4/1）　径2～3cmの橙色粒子
⑫ オリーブ黒色粘質土（5Y2/2）　径2～3㎜の白色粒子　径5㎜の灰オリーブ色粒子　径1～2cmのブロック状の砂少
⑬ 暗緑灰色粘質土（10Y4/1）　径3～5㎜の砂質粒子ごく少
⑭ 黒褐色土（7.5Y3/1）　径1～2㎜mの橙色粒子少
⑮ 灰黄褐色（10YR4/2）　径3～5㎜の白色粒子・橙色粒子
⑯ 灰黄褐色（10YR4/2）　径2～3㎜の白色粒子少　径3～5㎜の橙色粒子多　炭化物
⑰ 灰黄褐色（10YR4/2）　径2～3㎜の白色粒子少　径3～5㎜の橙色粒子多　炭化物
⑱　灰黄色土（2.5Y6/2）　径3～5㎜の白色粒子少　径3～5㎜橙色粒子多　炭化物少　鉄分
⑲ 灰黄色土（2.5Y6/2）　径3～5㎜の白色粒子少　径3～5㎜橙色粒子多　炭化物少　鉄分　⑱よりやや暗い
⑳ 灰黄色土（2.5Y7/2）　径2～3㎜の白色粒子少　黒褐色土多　鉄分
㉑ 暗青灰土（10BG4/1）　径3～5㎜の白色粒子少　径2～3㎜橙色粒子多　黒褐色土
㉒ 青黒粘土（5B2/1）　径1～2㎜の白色粒子少
㉓ にぶい黄橙色土（10YR4/3）　径2～3㎜の橙色粒子多
㉔ 黒褐色土（10YR3/1）　径2～3㎜の橙色粒子ごく少
㉕ 褐灰色土（10YR6/1）　径1～2㎜の白色粒子少　径2～3㎜橙色粒子多　炭化物
㉖ 褐灰色土（10YR6/1）　径1～2㎜の白色粒子少　径2～3㎜橙色粒子多　鉄分　黒褐色ブロック
㉗ 黒褐色土（10YR3/1）　径2～3㎜の橙色粒子ごく少
㉘ 褐灰色土（10YR6/1）　径1～2㎜の白色粒子少　径2～3㎜橙色粒子多　鉄分　黒褐色ブロック
㉙ 黒褐色土（10YR3/1）　径2～3㎜の橙色粒子ごく少
㉚ 褐灰色土（10YR4/1）　径3～5㎜の白色粒子少　径3～5㎜橙色粒子多　鉄分
㉛ 暗緑灰色粘質土（10GY4/1）　径2～3㎜の白色粒子少　炭化物
㉜ 浅黄色土（2.5Y7/3）　砂質　鉄分多　硬くしまっている
㉝ にぶい黄色土（2.5Y6/3）　径1～2㎜の白色粒子　径2～3㎜の橙色粒子少　灰色粘土ブロック多
㉞ 灰黄色土（2.5Y6/3）　砂礫　鉄分多
㉟ 黒色砂（N2/0）　木目の細かい砂　やや青みがかる

第６図　１－２区　堀土層断面図

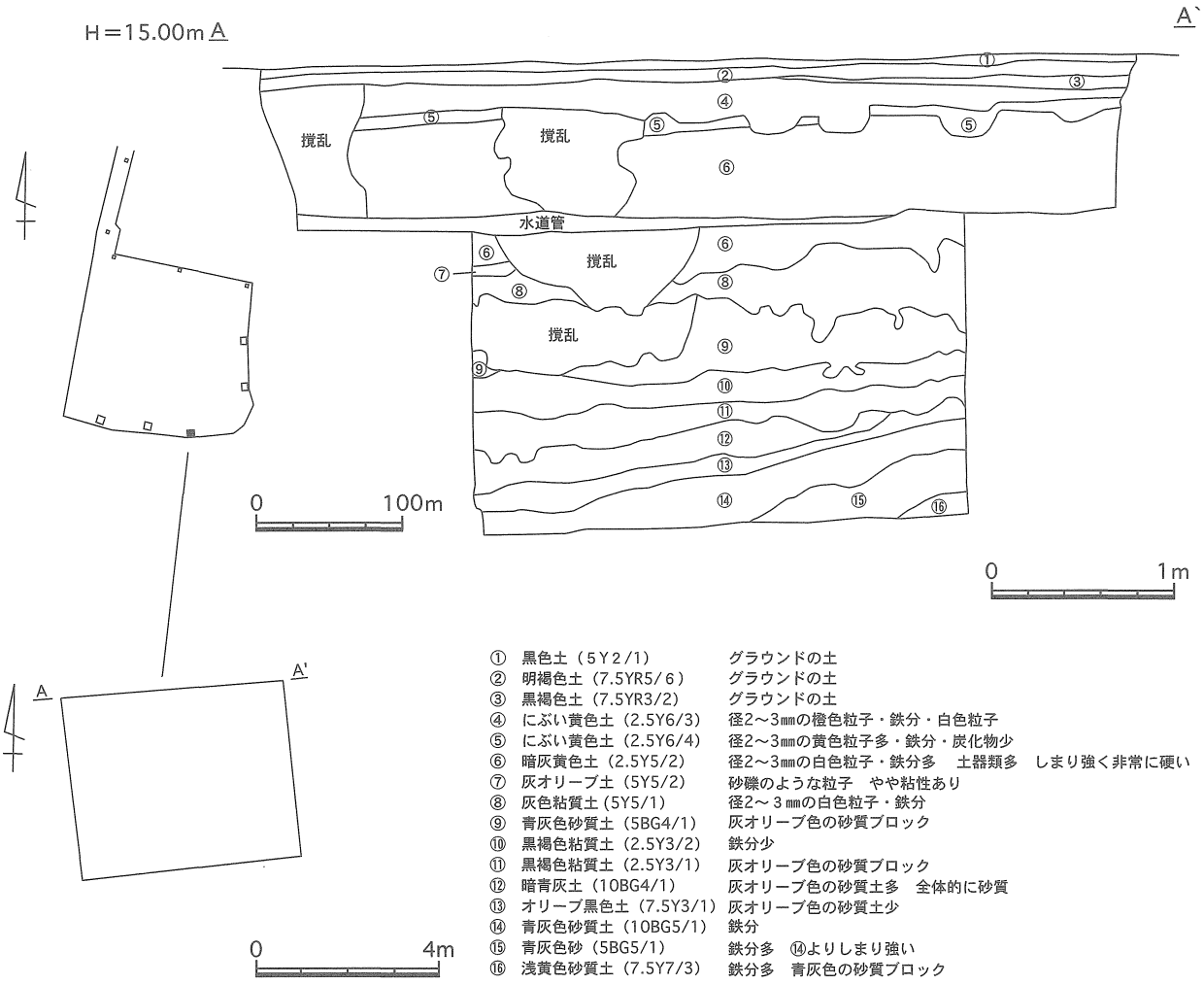
１－３区（第７図　図版２－２）

Ｃ―10グリッド、グラウンド南東のバックネット西端に設定したものである。東側側溝の掘方や水道管の埋設等、後世の撹乱が多く認められた。約15～20cmに及ぶグラウンド造成土直下は、弥生時代以降の遺物を含む堅くしまったにぶい黄色土や灰黄色土が1.2m程盛られていた。その下に堆積する青灰色砂質土（⑨層）以下が、韮山城に関連する造成土である。

城の造成土の下部には、鉄分を含む粘性の強い土が何層かに渡って堆積しており、さらに下部に再び青灰色の砂質土（⑫・⑭・⑮層）が堆積している。青灰色の砂質土（城の造成土）の間に粘性の強い埋土が堆積するという状況は、1990年度の調査とほぼ同様であり、城の造成が数次にわたって行われたことを示すものである。

１－４区（第８図　図版５－１・２）

Ｆ―14グリッド、グラウンド東側のバックネット北側に位置する。他の調査区同様、グラウンド造成土が約15cm程盛られており、その下に水道管や暗渠等の埋設物による撹乱が著しい。下部の堆積状態は



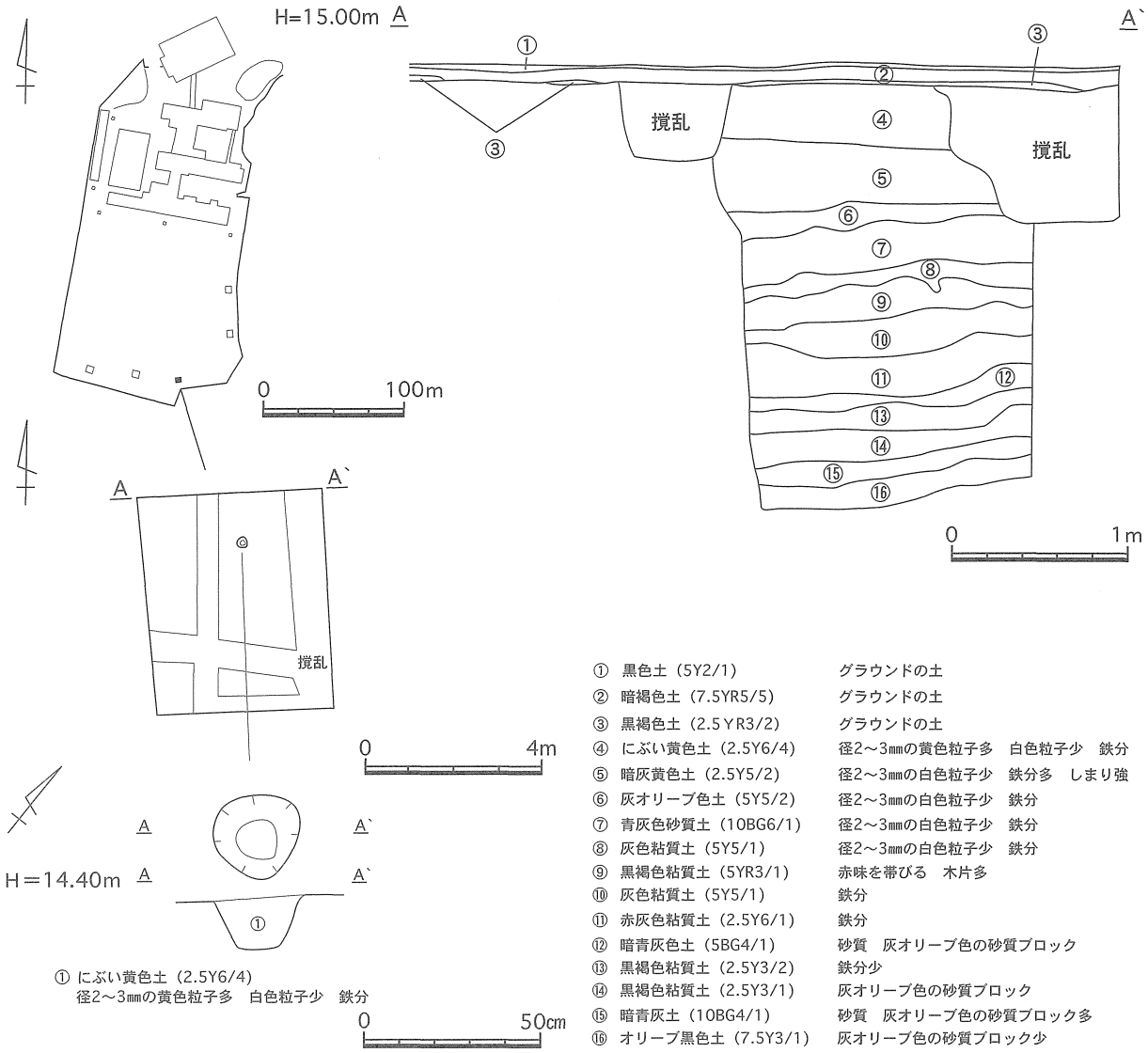
第７図　１－３区　平面図・土層断面図

良好で、青灰色砂質土（城の造成土）（⑦・⑫・⑮層）の間に粘性の強い土が何層かに分かれて堆積するという状況は、１－３区とほぼ同様である。本調査区では、城の造成土の上部に堆積する暗灰黄色土（⑤層）の上面において円形のピットを１基検出した。直径約25㎝、検出面からの深さは約15㎝である。時期等については不明である。

１－５区（第９図　図版５－３、図版６、図版７－１）

Ｉ－14グリッド，グラウンド東端中央部に位置する。本調査区は、調査区北側と南側において土の堆積状況に著しい相違が認められた。北側においては、グラウンド直下に浅黄色の砂質の岩盤層（地山）が広がっていた。この地山層は東側に位置する本城の丘陵を構成する岩盤と同様であることから、北側については、丘陵の裾部を削平したことによって形成されている。南側では、グラウンド直下に１－３区・１－４区と同様の埋土（にぶい黄色土③、暗灰黄色土④）が検出され、さらにその上に堆積する灰褐色土（②層）の上面において、北側の地山層と平場を形成する状況が確認された。この平場を検出面として、割石を用いた石組みの井戸１基を確認した。

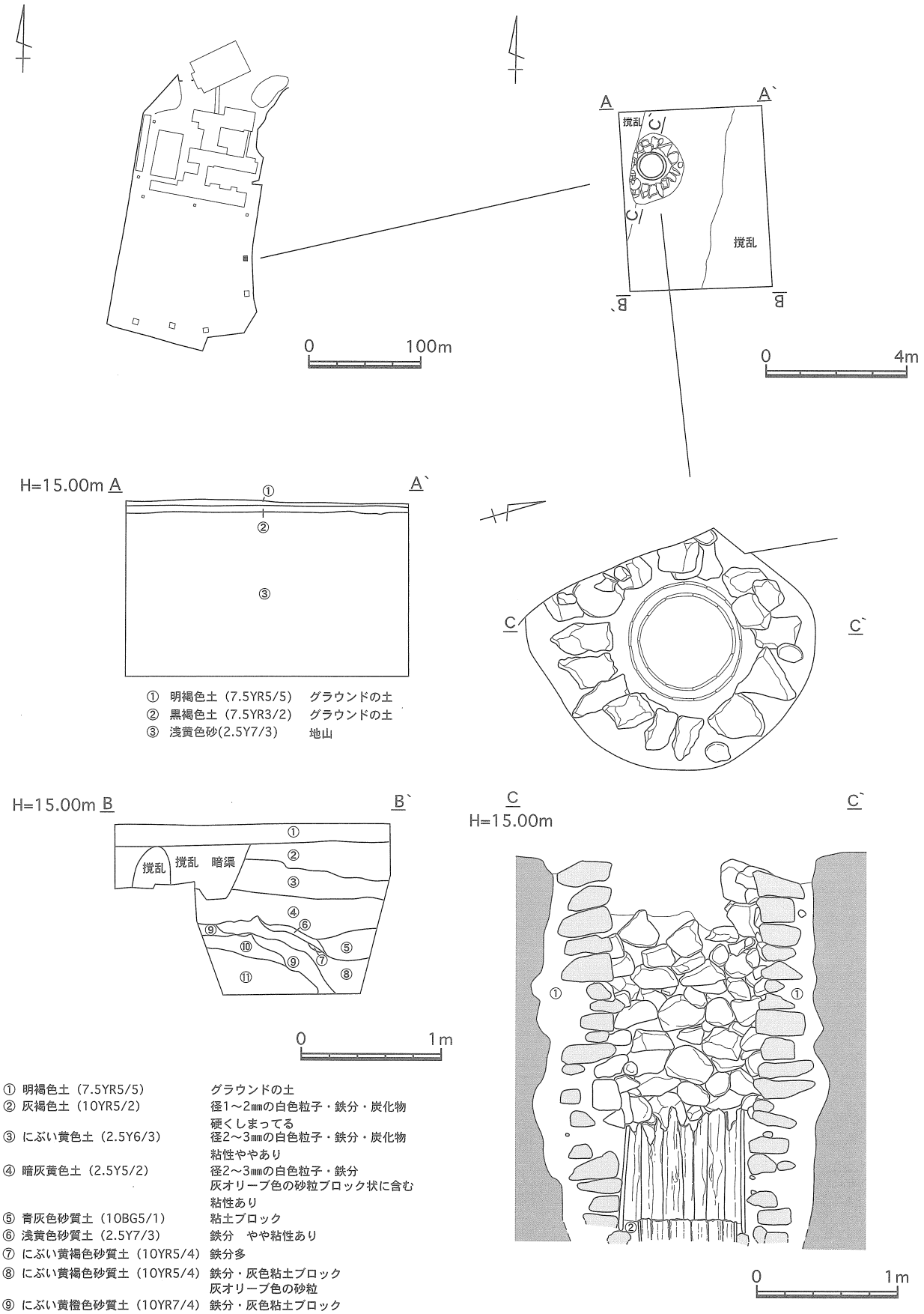
西側部分は埋設管により一部破壊されていたが、全体の残存状態は良好である。堀方の形状はやや不整な円形で、残存部分の最大幅は約2.1mである。石組みは割石の小口面を内側に揃える形で積まれている。断面は中位付近でやや外に膨らむ円筒形で、石組みの内径は最大で約1.1m、井筒が設置された箇所



第８図　１－４区　平面図・土層断面図、ピット平面図・断面図

から僅かに内径が狭まっていき、１段目で約95㎝、２段目で約80㎝である。深さについては、下部において湧水が著しく、また、工事計画掘削高よりも深くなったことから、調査を終了したため不明である。検出面から1.8mほど掘削したところで幅約20㎝、長さ約90㎝の材を15枚組み合わせた、直径約80㎝の桶状の井戸枠を確認した。さらに下部には、同様の材を11枚組み合わせた直径約70㎝の井戸枠を検出した。１段目と２段目の隙間には砂礫が充填されていた。井戸の覆土から、15世紀後半に比定される古瀬戸の卸目付大皿の破片（図版10―16）が出土している。ただし、この遺物は流れ込みの可能性もあり、また、本調査区の土層の状況から見て、グラウンド東側の丘陵（龍城山）の裾端部を削り出し、そこに井戸を設置したと思われるので、この井戸は近世以降の可能性もある。従って、ここでは明確な時期比定を避け、戦国時代～近世の遺構としておきたい。

また、南側下部には地山層が認められるが、北西―南東方向を軸に、南西方向に落ち込んでいた。また、上述の埋土と地山層の間には、城の造成土に類似した青灰色の砂質土（⑤層）が同様の方向に堆積していた。こうした状況からは、本調査区の南側が、削平前に存在した山裾部分と城の造成部分の転換地点である可能性や、山裾に沿って存在したと考えられている内堀に関連する落ち込みである可能性が指摘できよう。



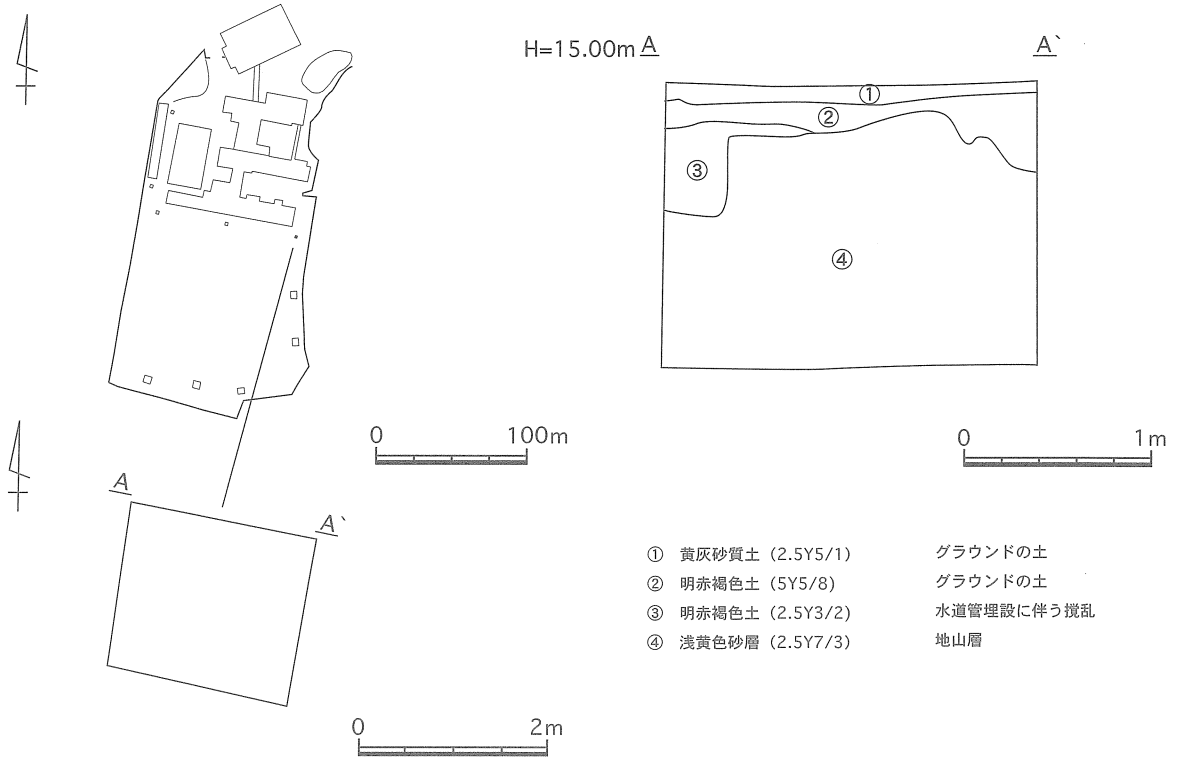
① 明褐色土（7.5YR5/5） グラウンドの土
② 灰褐色土（10YR5/2） 径1～2㎜の白色粒子・鉄分・炭化物
硬くしまってる
③ にぶい黄色土（2.5Y6/3） 径2～3㎜の白色粒子・鉄分・炭化物
粘性ややあり
④ 暗灰黄色土（2.5Y5/2） 径2～3㎜の白色粒子・鉄分
灰オリーブ色の砂粒ブロック状に含む
粘性あり
⑤ 青灰色砂質土（10BG5/1） 粘土ブロック
⑥ 浅黄色砂質土（2.5Y7/3） 鉄分　やや粘性あり
⑦ にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4） 鉄分多
⑧ にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4） 鉄分・灰色粘土ブロック
灰オリーブ色の砂粒
⑨ にぶい黄橙色砂質土（10YR7/4） 鉄分・灰色粘土ブロック
⑩ にぶい黄橙色砂質土（10YR7/4） 鉄分　ややしまりが弱い
⑪ にぶい黄橙色砂質土（10YR7/4） 浅黄橙色の粘土ブロック
灰オリーブ色の砂粒　砂礫がブロック状に硬化

① 褐色土（10Y4/4） 径２～３の砂粒多　中位以下水分
② 黒褐色砂礫（2.5Y3/1）径3～5㎜の礫主体

第９図　１－５区　平面図・土層断面図、井戸跡平面図・断面図

２－１区（第10図　図版７－２）

M―14グリッド、グラウンド北東隅に位置する。一部水道管の埋設があったが、調査区のほとんど全面において、約20～30cmのグラウンド造成土の直下で丘陵の岩盤を検出した。遺構・遺物は確認されなかった。



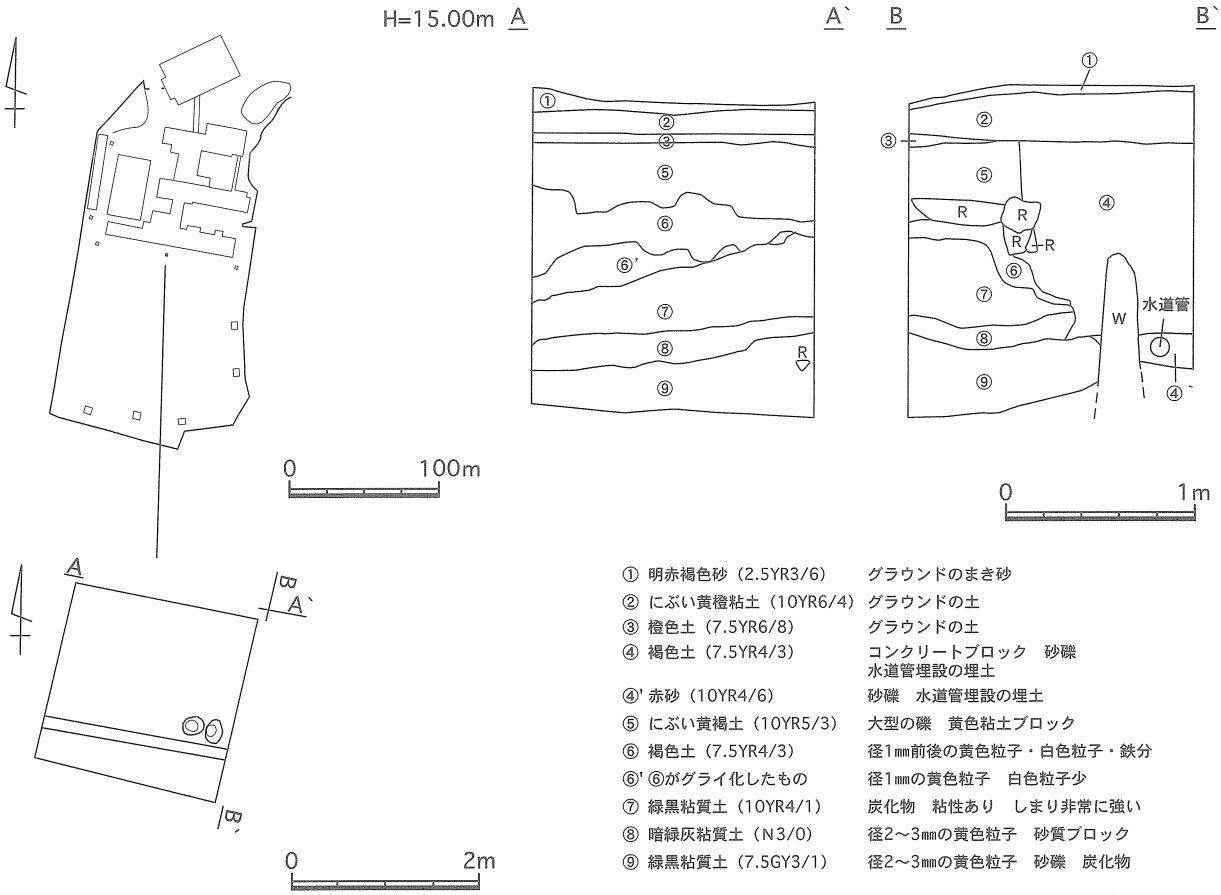
第10図　２－１区　平面図・土層断面図

２－２区（第11図　図版７－３、図版８－１）

N－９グリッド、グラウンド北側中央に位置する。他の調査区と同様、全面にグラウンドの造成土が広がる。調査区南側は撹乱によって削平を受けていたものの、前回調査で検出された中堀の位置や北壁の土層の堆積状況から判断して、本調査区は中堀の一部であると考えられる。中堀と考えられるのは、中位以下に認められる、西に向かってやや傾斜して堆積する粘性の強い土（⑦層以下）である。これらの土の中からは近世の遺物（第13図―６、図版10―18他）が出土している。１－２区で検出された中堀の土層の堆積状況と比較すると、本調査区で確認された土層は、堀が埋まる段階のものであると考えられる。また、本調査区からは、直径約20cmの丸い柱状の材が２本並んで検出されたが、校舎立替時の調査と１－２区で検出された丸杭や角柱状の材とは形状が異なっていること、また、二本が間隔を開けずに東西方向に並んでいるという状況から、堀に直接関連するものではないと判断した。

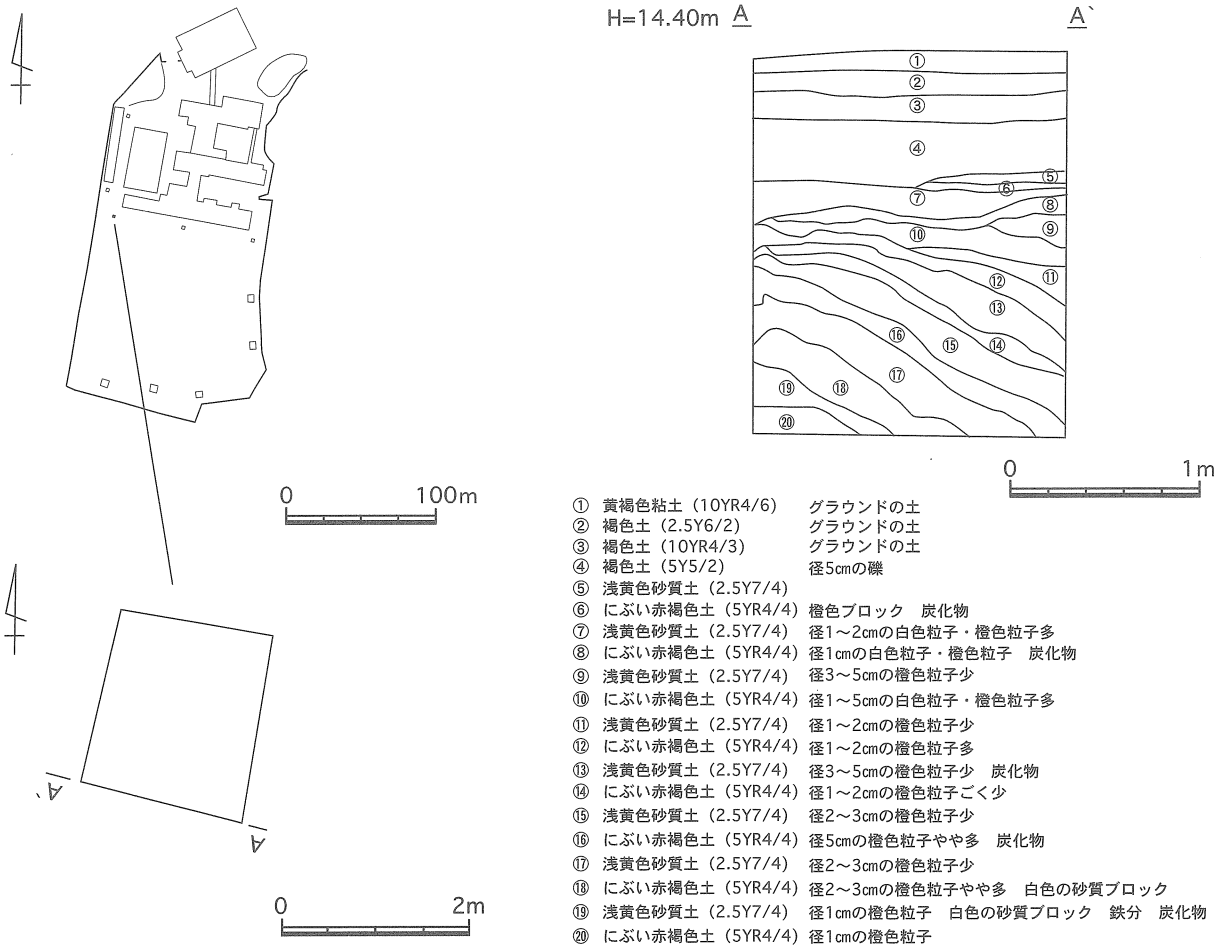
２－３区（第12図　図版８－２）

O－５グリッド、グラウンド北西隅に位置する。北側については、撹乱による削平を受けていたため、南側の土層の状況を確認したところ、１－１区と同様の斜行堆積が確認された。東側に向かって斜行しており、浅黄色砂質土とにぶい赤褐色土が互層を成すように堆積していた。近代以降に埋め立てられたものであろう。



① 明赤褐色砂（2.5YR3/6）　グラウンドのまき砂
② にぶい黄橙粘土（10YR6/4）　グラウンドの土
③ 橙色土（7.5YR6/8）　グラウンドの土
④ 褐色土（7.5YR4/3）　コンクリートブロック　砂礫　水道管埋設の埋土
④' 赤砂（10YR4/6）　砂礫　水道管埋設の埋土
⑤ にぶい黄褐土（10YR5/3）　大型の礫　黄色粘土ブロック
⑥ 褐色土（7.5YR4/3）　径1㎜前後の黄色粒子・白色粒子・鉄分
⑥' ⑥がグライ化したもの　径1㎜の黄色粒子　白色粒子少
⑦ 緑黒粘質土（10YR4/1）　炭化物　粘性あり　しまり非常に強い
⑧ 暗緑灰粘質土（N3/0）　径2～3㎜の黄色粒子　砂質ブロック
⑨ 緑黒粘質土（7.5GY3/1）　径2～3㎜の黄色粒子　砂礫　炭化物

第11図　２－２区　平面図・土層断面図



① 黄褐色粘土（10YR4/6）　グラウンドの土
② 褐色土（2.5Y6/2）　グラウンドの土
③ 褐色土（10YR4/3）　グラウンドの土
④ 褐色土（5Y5/2）　径5㎝の礫
⑤ 浅黄色砂質土（2.5Y7/4）
⑥ にぶい赤褐色土（5YR4/4）　橙色ブロック　炭化物
⑦ 浅黄色砂質土（2.5Y7/4）　径1～2㎝の白色粒子・橙色粒子多
⑧ にぶい赤褐色土（5YR4/4）　径1㎝の白色粒子・橙色粒子　炭化物
⑨ 浅黄色砂質土（2.5Y7/4）　径3～5㎝の橙色粒子少
⑩ にぶい赤褐色土（5YR4/4）　径1～5㎝の白色粒子・橙色粒子多
⑪ 浅黄色砂質土（2.5Y7/4）　径1～2㎝の橙色粒子少
⑫ にぶい赤褐色土（5YR4/4）　径1～2㎝の橙色粒子多
⑬ 浅黄色砂質土（2.5Y7/4）　径3～5㎝の橙色粒子少　炭化物
⑭ にぶい赤褐色土（5YR4/4）　径1～2㎝の橙色粒子ごく少
⑮ 浅黄色砂質土（2.5Y7/4）　径2～3㎝の橙色粒子少
⑯ にぶい赤褐色土（5YR4/4）　径5㎝の橙色粒子やや多　炭化物
⑰ 浅黄色砂質土（2.5Y7/4）　径2～3㎝の橙色粒子少
⑱ にぶい赤褐色土（5YR4/4）　径2～3㎝の橙色粒子やや多　白色の砂質ブロック
⑲ 浅黄色砂質土（2.5Y7/4）　径1㎝の橙色粒子　白色の砂質ブロック　鉄分　炭化物
⑳ にぶい赤褐色土（5YR4/4）　径1㎝の橙色粒子

第12図　２－３区　平面図・土層断面図

２－４区

Ｐ－４・Ｑ－４グリッドに位置する。掘削直後に水道管、及び給湯用の配線ケーブルが確認された。西側に造られた工事車両用スロープの土層断面の状況から、校舎築造に関連する埋土が続くものと判断し、写真のみの記録とした。

２－５区（図版８－３）

Ｕ－６・Ｖ－６グリッドに位置する。掘削開始直後、南北方向に石垣が検出された。聞き取り調査からこの石垣は明治期の校舎の石垣と考えられ、さらに周辺の土の堆積状況から、工事掘削深度まで新しい造成土と判断できたため、写真のみの記録とした。

（木村忠義）

第２節　遺　　物

今回の調査では、土器・陶磁器・石器・木製品（木柱・漆器・礎板？）等の遺物が出土した。遺物のかなりの部分は近年の造成土・撹乱土中から出土したもので、全てが本遺跡のものとは限らないが、それらから出土した遺物は、その時期などから、多くが本遺跡内か周辺の遺跡のものと思われる。なお、これらの遺物の出土位置は第２表に記載したが、記載の無いものについては文中に記した。

⑴土器・陶磁器・石器（第13図　図版９・10　表２）

今回の調査では、土器片394点、陶磁器片12点、石器1点が出土した。このうち土器は、112点がかわらけであり、それ以外の土器の多くは弥生後期～古代に属するものと思われる。ただし、須恵器は極めて少ない。今回の調査で出土した土器・陶磁器は細片が多く、実測可能な個体は非常に少ない。図示したものがその全てである。また、実測不可能であっても、報告書に掲載する必要があるものは、写真図版のみで示した。

第13図１～３は弥生時代後期後半～古墳時代前期前半に比定されると思われる。１と２は壺の底部。１には木葉痕が見られ、内面には刷毛目調整が行われる。２は器壁が厚く、かなり大型の壺であると推定される。３は台付甕の接合部～脚部にかけての破片。ただし、脚端部は欠失している。外面に刷毛目調整が行われているが、摩耗が著しい。

４は須恵器で、壺形土器（長頸壺か）の肩部の破片であると思われる。横位の沈線を施し、その下に刷毛状工具による波状紋を施す。色調は暗い灰色を呈し、湖西窯の製品で多く見られる薄い灰色の須恵器と異なっている。また、裏面には焼成前に付けられた凹凸がやや顕著に見られる。

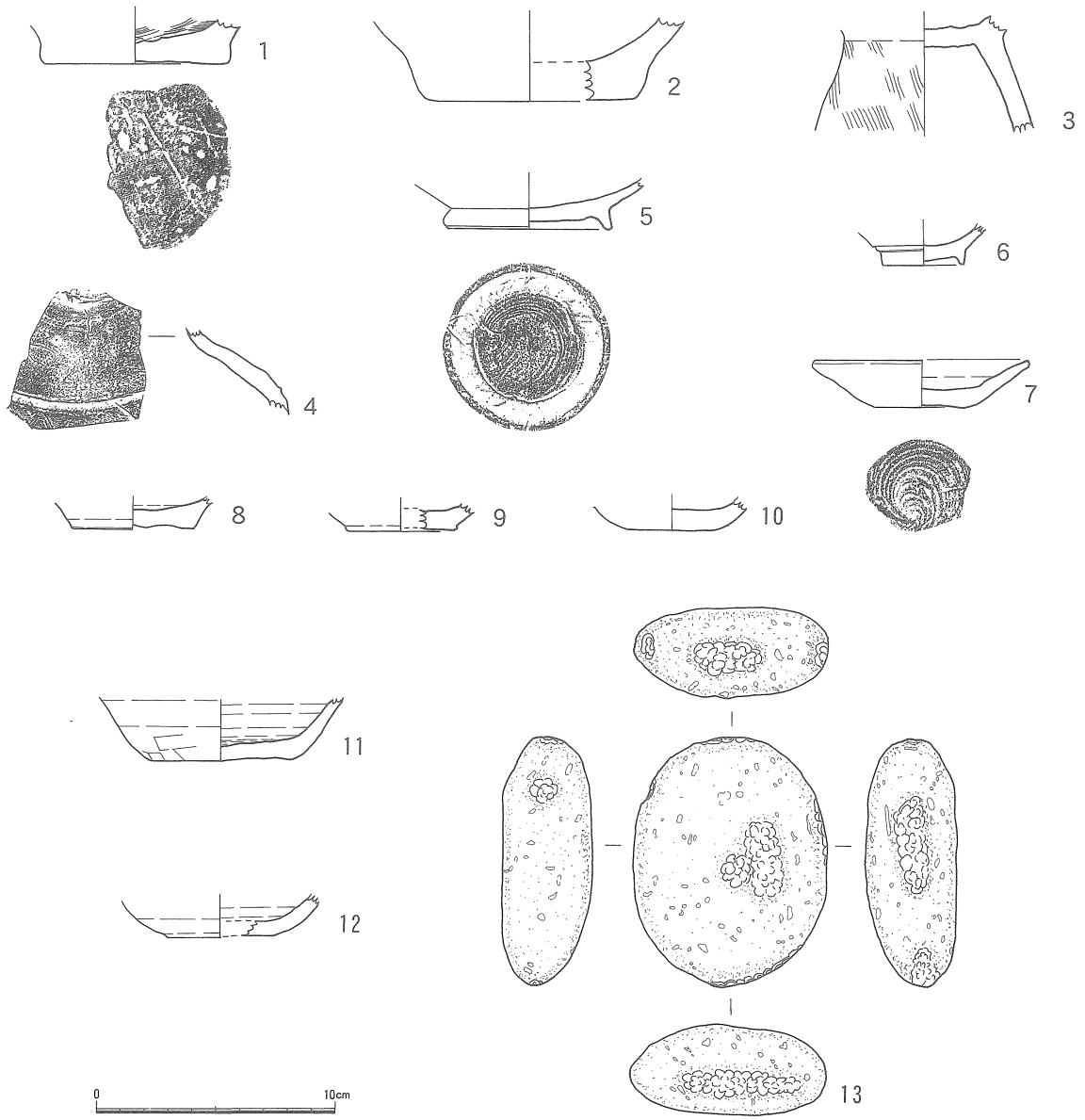
５は灰釉陶器の底部破片。高台はほぼ残存しているが、胴部の残りは悪い。回転糸切りにより切り離しを行い、高台を貼り付けている。土器の裏面には重ね焼き痕が見られる。法量等から10世紀後半、折戸53号窯式の新しい段階に併行する在地系の製品であると考えられる。

６は近世の瀬戸・美濃産の陶器。小杯と思われるが、残存状況が悪いため確定し得ない。内外面共に浅い黄色の釉（灰釉と長石釉と思われる）をかけている。

７から12はかわらけである。このうち器形の大要について分かるものは、口縁まで残存する７の他は11しかない。この２点から判断する限り、中世後期のかわらけであり、16世紀のものと考えられる。他の個体も同様であると推定される。このうち、８・10・11は１－２区から検出された堀の覆土から出土した。特に11は、堀の改修のための造作土の可能性のある㉜層（図６参照）中より出土した。16世紀の古い段階のものと考えられる。

13は敲石。今回の調査で出土した唯一の石器である。最大長10.55cm、最大幅8.15cm、厚さ3.8cmであ

り、片面部に１箇所、側面部に４箇所の弱い敲打痕が見られる。恐らく弥生後期～古墳前期の遺物であろう。１－５区の井戸内より出土。



第13図　出土遺物実測図①（土器・陶磁器・石器）

次に実測図で図示できず、写真図版にのみ掲載した遺物について述べる。

図版10―14は土師器の甕。口縁の残存状況が悪く、口径を出し得ないため図示しなかった。口縁部はやや急に外反し、胴部は胴中部に向かって緩やかにふくらむ器形であると想定される。口縁部は横方向の、胴部は縦方向のナデ調整が行われる。裏面も同様である。口縁部は茶褐色だが、胴部は暗い褐色を呈す。最大残存高は13.3cm。律令期の在地系の甕形土器であるが、細かい年代は不明である。１－５区の②層中の出土で、城の造成土より上層の出土である。

図版10―16は卸目付大皿の口縁部。口縁はＳ字状に屈曲する。表裏面とも黒色の鉄釉がかかっているが、口縁端部に近い位置は暗茶褐色になっている。古瀬戸後期Ⅳ期新段階に比定され、15世紀後半の年代が与えられる。早雲による韮山城の築城が1490～1500年前後と考えられる（註）ので、韮山城築城直

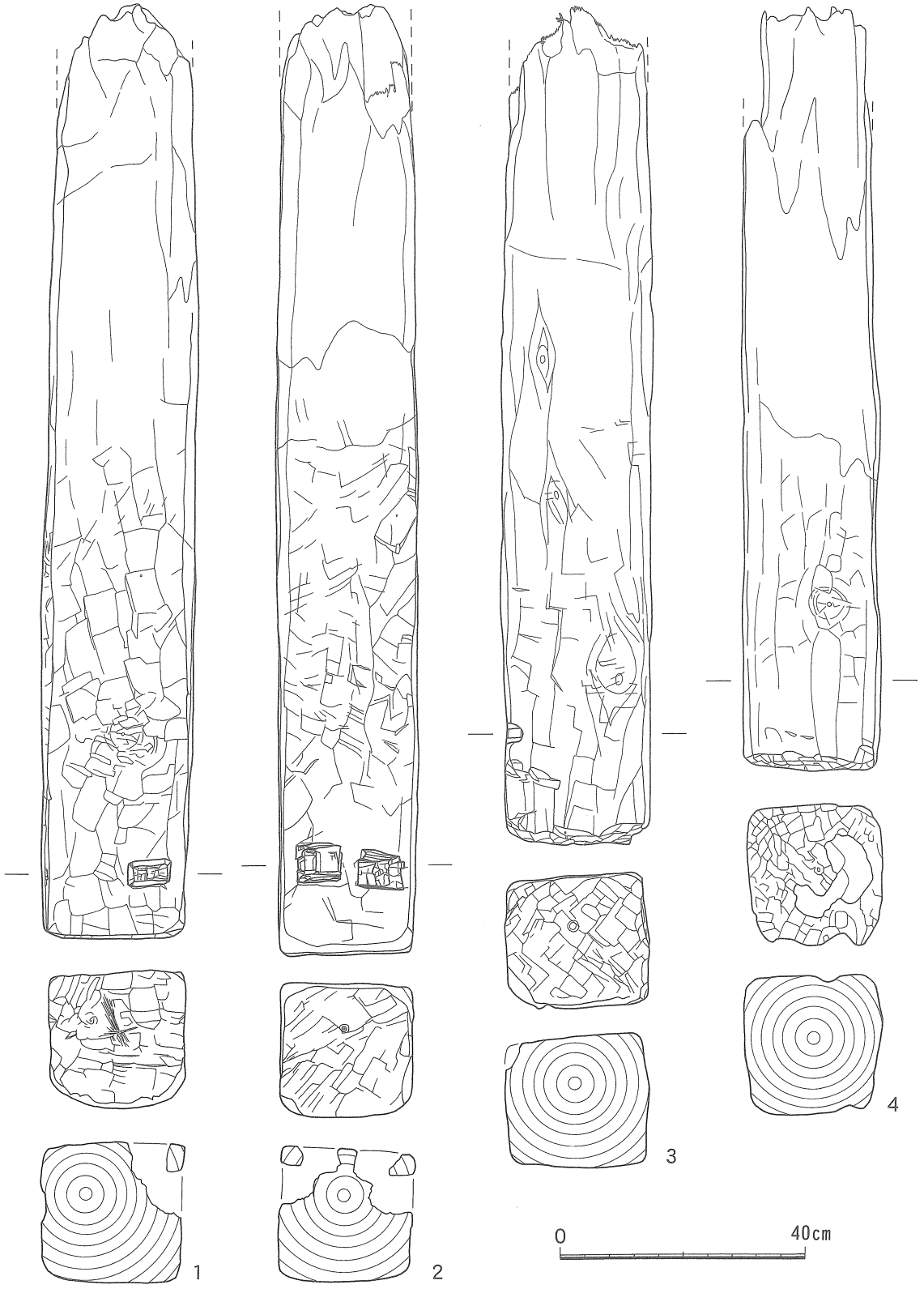
第２表　土器・陶磁器観察表

図	番号	調査区	遺構	出土層位	器　種	部　位	法　量 （　）は想定	胎　土	外面色調 内面色調	備　考
13	1	１－４		⑥層	壺	底部	底径（8.0）	白色粒子 灰色粒子	10YR6/3にぶい黄橙 7.5YR6/4にぶい橙	
13	2	１－４		⑥層	壺	底部	底径（8.8）	白色粒子　灰色粒子 透明粒子	7.5YR5/4にぶい褐 7.5YR6/4にぶい橙	底部の 約1/2残存
13	3	１－１		撹乱	台付甕	胴部～脚部	接合部径（6.6）	白色粒子 灰色粒子	10YR6/3にぶい黄橙 10YR6/4にぶい黄橙	
13	4	１－４		⑥層	壺（長頸壺か？）	肩部		白色粒子	N5/0灰 （両面とも）	
13	5	１－４		⑥層	坏	底部	底径6.6	白色砂粒	2.5Y7/1灰白 （両面とも）	
13	6	２－２	堀	⑨層	瀬戸美濃小坏？	底部	底径3.4	白色粒子	2.5Y8/3淡黄 5Y7/3浅黄（釉）	
13	7	１－１		㉑層	かわらけ	口縁部	口径（8.85）底径3.8 器高1.93	赤褐色粒子 透明粒子	7.5YR6/4にぶい橙	
13	8	１－２	堀	㉓層	かわらけ	底部	底径5.0	赤褐色粒子 白色粒子　透明粒子	7.5YR6/6橙 （両面とも）	底部の 約3/5残存
13	9	１－１		埋土	かわらけ	底部	底径（4.36）	白色粒子	5YR6/6橙 （両面とも）	底部の 約1/3残存
13	10	１－２	堀	㉛層一括	かわらけ	底部	底径4.0	白色粒子	10YR6/3にぶい黄橙 （両面とも）	底部の 約1/2弱残存
13	11	１－２	堀	㉜層	かわらけ	底部	底径5.8	白色粒子	7.5YR6/4にぶい橙 （両面とも）	底部残存
13	12			粘質土上 灰白土層	かわらけ	底部	底径4.4	赤褐色粒子 灰色粒子　透明粒子	7.5YR6/6橙 （両面とも）	

前の遺物の可能性もある。１－５区の井戸跡の覆土中より出土した。図版10―17は底部のごく一部しか残存していないが、極めて低平な造り出し高台がめぐっているのが見られる。高台より更に内側にはもう一本の高台が貼り付いているが、これは重ね焼きの際に別の個体の高台が貼り付いてしまったか、焼成のための台として噛ませた破片の高台が貼り付いたかの何れかであろう。底面には淡緑色の灰釉がかかっている部分が僅かに残っている（内面は剥落のため不明）。これは瀬戸美濃の大窯期のものであるが、Ⅱ期かⅢ期か判然としない。丸皿の可能性があるが、小片のため確定は出来ない。16世紀中葉から後葉の年代が与えられるが、これは韮山城が城として機能していた時代の遺物である。１－５区の②層の出土。

図版10―18～21は全て江戸時代の染付片。18～19世紀のものと考えられる。18のみ肥前焼で、それ以外は瀬戸美濃と思われる。19は磁器写しの陶胎染付。このうち20には焼き継ぎの痕跡が見られ、19世紀のものである。図版10―15は近代の杯。内外面とも極めて淡い青色を呈し、外面に縦に二行にわたって「大仁」「松友支店」の文字がある。字体等から戦後の物ではなく、明治～昭和戦前期のものと判断した。恐らく商店の景品ないしは贈答用の品として製造されたと思われる。「松友支店」については報告書作成段階では詳らかに出来なかった。高さ5.1cm、口径6.4cm、高台径3.0cm。１－１区の出土。

（註）韮山城築城についての史料上の正確な年次は不明である。北条早雲による堀越御所の攻略は1491（延徳３）年または1493（明応２）年とするのが定説であり、その時点で伊豆に本拠を構え、韮山城を築城したとするのが一般的な考えである。これとは別に、既に韮山城は存在し、1488（長享２）年に早雲が韮山城に入城したとする史料（『増訂豆州志稿』）もある。後者の記述を一概に全面否定できず、また、堀越御所攻略後韮山城築城が直ちに行われたか確証はない。従ってここでは、1490年～1500年代前後の築造と一応記述しておく。



第14図　出土遺物実測図②（木製品）

⑵木製品（第14図　第３表　図版11）

今回の調査で出土した木製品は数が少ない。実測図を作成したのは第14図の４点の角材（木柱）のみである。何れも１―２区において「中堀」の築造時または改修時に埋設されたと思われる材である（第

第３表　木製品計測表

図	番号	大項目	中項目	調査区	遺構	木取り	樹　　種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
14	1	建築材	柱	１－２	堀	芯持材	針葉樹（カヤ）	152.0	25.8	23.2	
14	2	建築材	柱	１－２	堀	芯持材	針葉樹（カヤ）	154.4	23.6	22.2	
14	3	建築材	柱	１－２	堀	芯持材	針葉樹（カヤ）	136.5	24.9	22.2	
14	4	建築材	柱	１－２	堀	芯持材	針葉樹（カヤ）	124.2	23.0	23.2	

５・６図参照)。取り上げの際には最も北のものを№１とし、以下南へ№２、№３とし、最も南のものを№４として番号を付けた。なお、第６図の土層断面図に記載されているのは№２である。また、第14図の番号は取り上げ番号と一致させた。すなわち、第14図１が最も北に設置されていたもの、第14図４が最も南に据えられていたものである。これらの材は全て底部に丁寧な加工痕を有し、平坦に仕上げられている。また、材の側面も腐食が及んでいない部分についてはやはり丁寧な加工痕がほぼ全面に見られる。

第14図１と２は両者ともに貫通する枘穴が穿かれている。１は正面と右側面に鑿により長方形の孔を開け、両者を連結させている。２は正面に二箇所、やや方形に近い孔を近接させて、ほぼ同じ高さで穿っている。なお、この孔は１と異なり、外側から材の中心部分に向かい傾斜させて穿たれている。左右側面には一つずつ孔を穿ち、正面の孔にそれぞれ連結させているが、こちらの孔は正面のものと異なり、傾斜させて穿たれてはいない。

３と４は孔の無い材。ただし、３は正面から左側端部にかけて鑿で削り取った穴がある。４は最も腐食が著しく、空洞が見られる。

以上の４点の材であるが、底部、側面部ともに丁寧な加工を行い、断面形状も腐食が進む以前は角を有し正方形に近く仕上げられていたと思われる。城内の建物で使用していた柱を転用した可能性が高い。

この他の木製品として、１－２区の盛土中より礎板の可能性のある長方形の板材が出土した。また、同区から検出された堀（中堀）の上部に行われた版築の最上層に石列が発見されたが、この石列の石の間から漆器片が出土している（第１節参照)。前者は盛土中の出土であったこと、後者は細片なため、図示は行わず、出土の記述にとどめておく。

（木崎道昭）

第5章　ま　と　め

⑴韮山城以前

今回の調査は、工事の掘削深度までの調査を基本にしたため、韮山城以前の包含層・遺構の掘削を行っていない。ただし、上層から遺物が出土する形で築城以前のデータが僅かだが得られている。

過去の調査でも示されたとおり（県教委　1992）（静文研　1997)、本城跡の低地部分は弥生時代以降の遺跡であり、今回の調査でもこの時期の遺物が出土している。

今回の調査で検出されたのは、弥生後期後半～古墳前期前半、古墳後期、律令期、10世紀後半、15世紀後半の遺物である。このうち、15世紀後半の年代が与えられる瀬戸美濃の卸目付大皿（図版10―16）はこの地における築城直前の人々の活動の可能性を示すものである。本研究所の平成７年度の調査でもこの時期の遺物が検出されている。近年、北条早雲の築城以前にこの地に城があった可能性が提起されている（小和田　1995)。もちろん、これらの遺物が後北条氏以前の城の存在についての直接の証拠とはならないが、将来の調査で、北条氏以前の城の痕跡が発見された場合、これらの遺物がそれに関係する可能性があると思われる。

⑵韮山城時代

１―２区で検出された堀が最も注目すべき遺構であり、この堀が検出できた意味は大きい。平成２年度の県教委による調査で検出された「中堀」と極めて類似し、位置の点からも「中堀」の南側の延長上にあるので「中堀」がここまで延びていたと考えるのが妥当であろう。これは江川文庫所蔵「伊豆国田方郡韮山古城図」とも合致する。今回の調査での新知見は、①トレンチ調査によって「中堀」の内部構造がある程度判明したこと。それによれば改修を受けている可能性があること、②築造ないし改修の時期が出土したかわらけの年代観より16世紀の古い段階以降であるという点である。細部には新たなデータも加わったが、最も大きな知見は以上の二つであろう。

今回の調査では調査区が広範囲にわたり、かつ個々の調査区の面積が狭小なために限定されたことしか述べられないが、韮山城は築城から廃城まで約一世紀の間使用され、後北条氏の伊豆支配の拠点として重要な役割を果たした。また、当然ながら他の競合する戦国大名に対する軍事的拠点としても必要不可欠な存在であった。従って、城の造作は時代により大きく変化したであろうし、そのような指摘もされてきた（菊川シンポジウム実行委員会　2005ほか)。今後の調査では城内の諸施設の配置状況を明確にしてゆくと同時に、城の形態がどのように変化していったかが大きな主眼になると思われる。

⑶韮山城以後その他

廃城以降、韮山城の低地部分は水田化し、本城部分は山林として現在の姿に至ったと思われるのだが、今回の調査ではこの間のデータは多くない。本調査において、本遺跡では初めて公表される石組み井戸が検出された。第４章１節でも述べたように、この井戸は戦国時代～近世のものと考えられ、明確な時期比定は困難だが、この時期の石組み井戸の一事例として活用が望まれるであろう。

（木崎道昭）

引用・参考文献

池谷初恵　2005ａ「中世韮山の様相　―陶磁器・土器の分析から―」『陶磁器から見る静岡県の中世社会　発表要旨・論考編』菊川シンポジウム実行委員会
池谷初恵　2005ｂ「遺物組成から見た中世韮山の空間構成」『中世の伊豆・駿河・遠江』高志書院
岩本正二　1993「西日本の中世井戸　―広島県草戸千軒町遺跡の井戸をめぐって―」『考古論集　潮見浩先生退官記念論文集』
小和田哲男　1995「第五章　早雲の時代と韮山」『韮山町史』第十巻
菊川シンポジウム実行委員会　2005『陶磁器から見る静岡県の中世社会　資料編』
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　1997『韮山城跡・韮山城内遺跡』
静岡県教育委員会　1988ａ『静岡県文化財地名表Ⅰ　―静岡市以東―』
静岡県教育委員会　1988ｂ『静岡県文化財地図Ⅰ　―静岡市以東―』
静岡県教育委員会　1992『韮山城跡』
韮山町教育委員会　1985『御所之内遺跡発掘調査報告書　予備調査～第３次調査』
韮山町教育委員会　2002『史跡北条氏邸跡発掘調査報告Ⅰ　―御所之内遺跡第13次発掘調査報告―』
韮山町教育委員会　2005『韮山町埋蔵文化財調査報告Ⅱ―御所之内遺跡第８・10・12・15・16・18・20次発掘調査報告―』
松井一明　1993「３．東海地域のかわらけ編年について」『久野城Ⅳ』袋井市教育委員会
水野和男　2005「越前一乗城下町の井戸」『考古学ジャーナル』537

謝　　辞

発掘調査及び報告書作成・執筆にあたっては、次の機関・方々から御教示や御協力を賜った（敬称略）。記して感謝申し上げます。

伊豆の国市教育委員会　静岡県立韮山高等学校　池谷初恵　望月保宏　望月由佳子　山田康雄

写　真　図　版

図版１

１　調査区近景（南西より）

２　調査区近景（北西より）

１　１－１区　北壁土層断面

２　１－３区　北壁土層断面

図版３

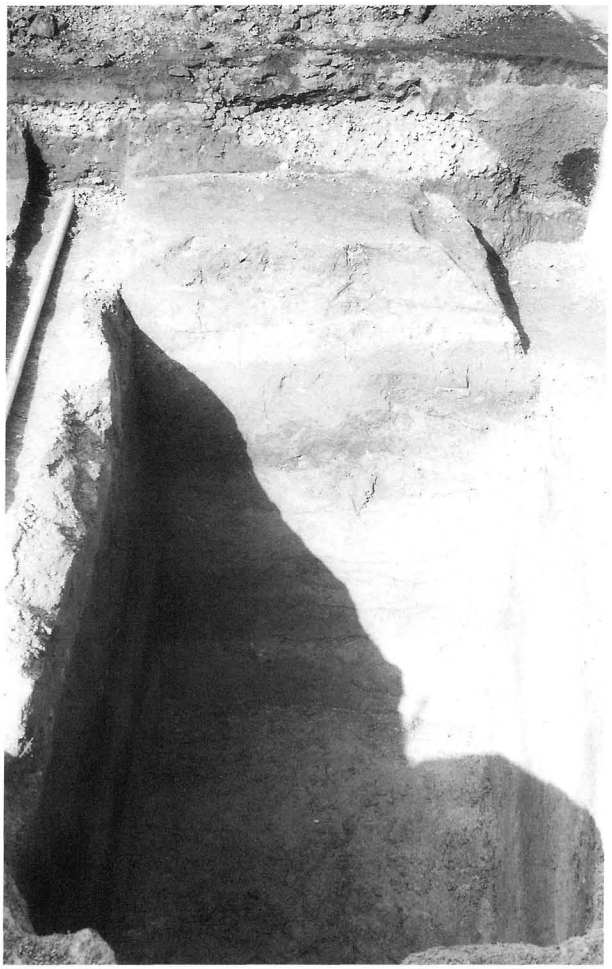
１　１－２区　中堀検出状況（南より）

２　１－２区　中堀解体状況（南より）

１　１－２区　中堀柱列基部検出状況（北より）

２　１－２区　中堀石積み検出状況
（南より）

図版５



１　１－４区　北壁土層断面

２　１－４区　ピット検出状況（南より）

３　１－５区　井戸跡（SE1）検出状況（西より）

１－５区　井戸跡（SE1）断面（東より）

図版７

１　１－５区　井戸跡
（SE1）中の井戸枠
検出状況（東より）

２　２－１区
北壁土層断面

３　２－２区　北壁土層断面

１　２－２区
東壁土層断面

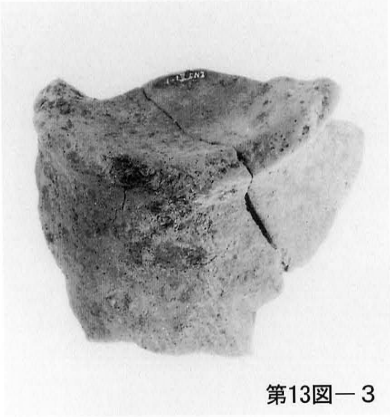
２　２－３区
南壁土層断面

３　２－５区
明治期校舎の
石垣（西より）

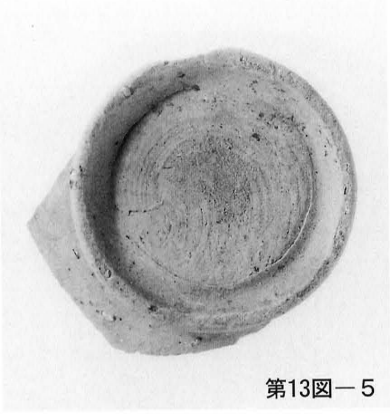
第13図－１内面

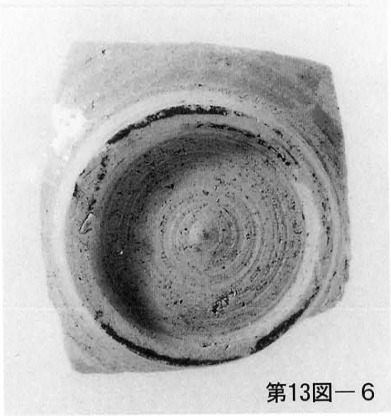
第13図－１底面

第13図－２


第13図－３

第13図－４

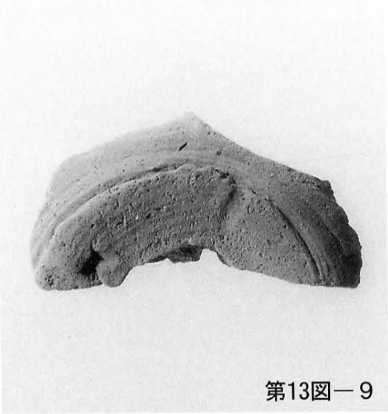

第13図－５


第13図－６

第13図－７

第13図－７裏面

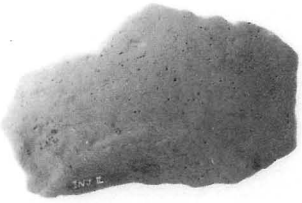
第13図－８


第13図－９

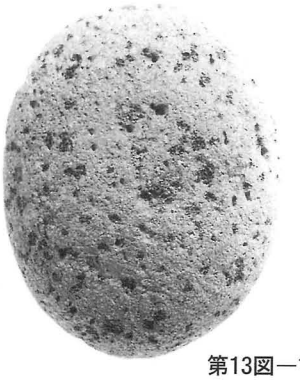
第13図－10

出土土器・陶磁器

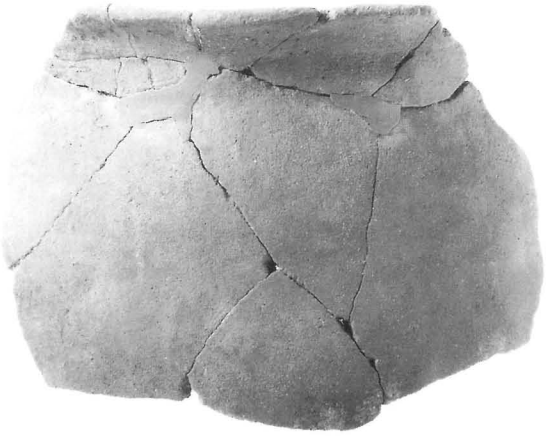
第13図—11



第13図—12

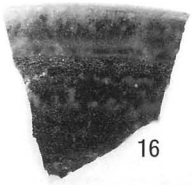


第13図—13



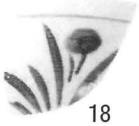
14

15

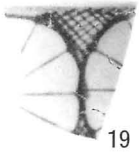


16

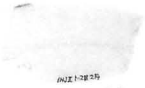
17



18



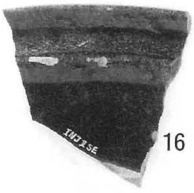
19



20

21

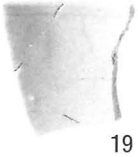
陶磁器（表）



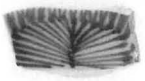
16

17

18



19



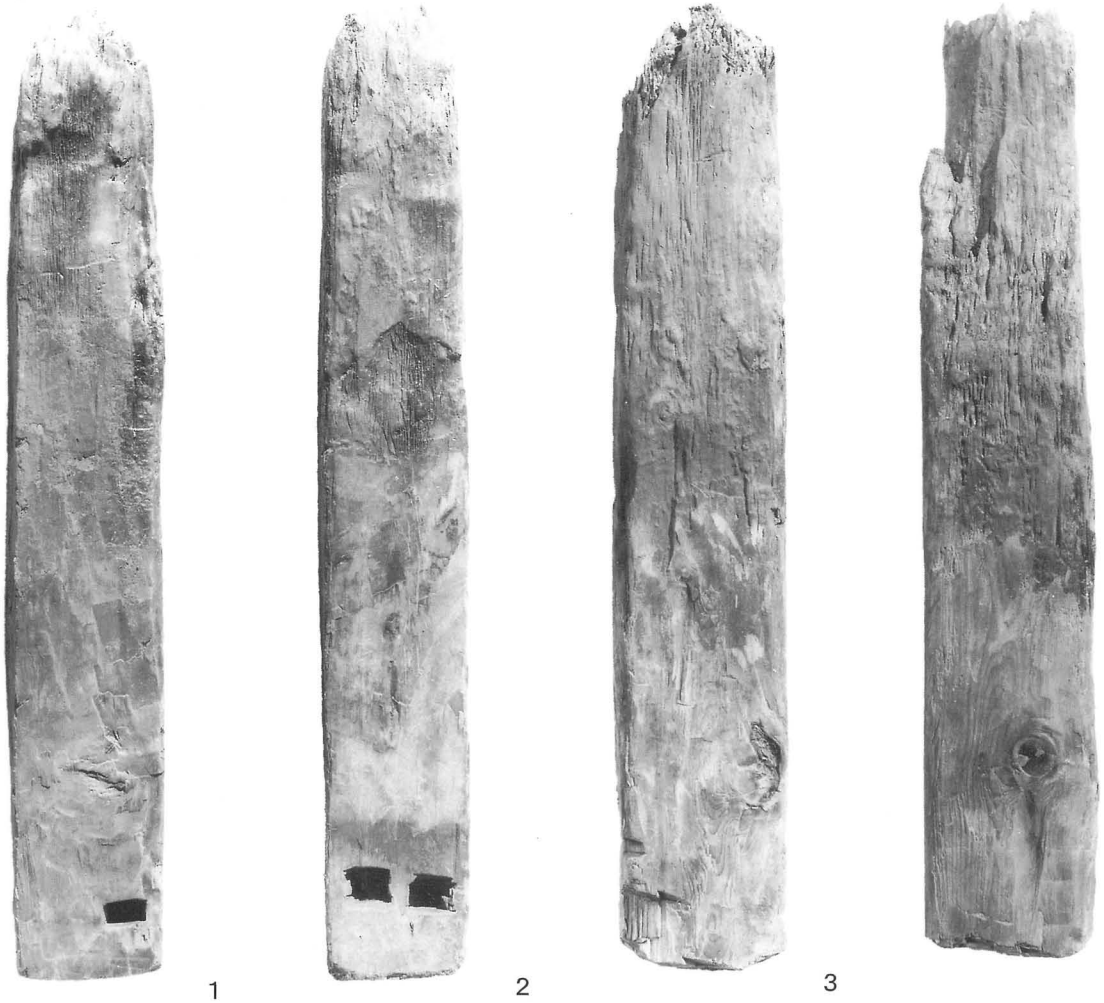
20

21

陶磁器（裏）

出土土器・陶磁器・石器

図版11

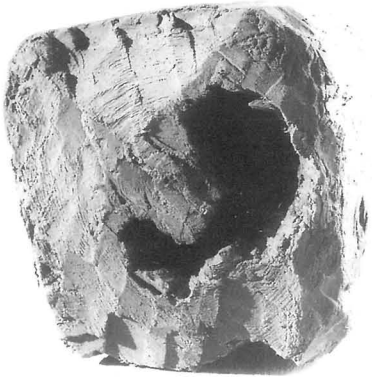


1　2　3　4

1底面

2底面

3底面



4底面

出土木製品

報告書抄録

ふりがな	にらやまじょうあと２
書名	韮山城跡Ⅱ
副書名	平成17年度静岡県立韮山高等学校夜間照明施設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第169集
編著者名	片桐英生／木崎道昭／木村忠義
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23番20号 TEL 054―262―4261（代表）　FAX 054―262―4266
発行年月日	2006年３月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	世界測地系				
にらやまじょうあと 韮山城跡	しずおかけん 静岡県 いずくにし 伊豆の国市 にらやまにらやま 韮山韮山229	22225		35° 3′ 17″	138° 57′ 18″	2005 10 11 ～ 2005 11 11	145㎡	学校整備（平成17年度静岡県立韮山高等学校夜間照明施設工事）に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
韮山城跡	城館	戦国時代	堀跡１（中堀） 堀跡？１ （外堀？）	かわらけ112片 大窯期瀬戸美濃（丸皿？）片１ 木製品（角柱４・漆器片）	中堀がグラウンド南側部分まで延びていることが明確となった
	散布地	弥生後期後半 ～古墳前期前半 古墳時代後期 律令期 平安時代中期		弥生土器・土師器・敲石１ 須恵器 土師器 山茶碗（折戸53号窯式新段階）	遺物は他遺跡のものが混在している可能性がある
	集落？	戦国～江戸	石組み井戸１	古瀬戸後期Ⅳ期新段階卸目付大皿片１	
	散布地	江戸時代 ～近代		陶磁器片（18世紀～19世紀の瀬戸美濃・備前） 字入りの杯１	字入りの杯には「大仁」「松友支店」の文字あり
	散布地	不明	ピット１	木製品（礎板？）１	

要約

韮山城跡は戦国時代に北条早雲によって築かれたとされている城郭遺跡である。今回は、韮山高校のグラウンドを中心にした10ヶ所の調査区を設定して調査を行った。その結果、遺構として戦国～江戸時代の石組み井戸等が検出された。堀跡のうち１本は、平成２年度に行われた調査で検出された「中堀」の延長上にあり、「中堀」の南側がグラウンド南端まで延びていることが明確になった。また、この堀は16世紀前半に改修を受けている可能性もある。更に、「外堀」内の可能性のある調査区も存在する。なお、今回の調査範囲は全て弥生時代以降の遺跡であり、戦国時代以外の時期の遺物も出土している。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第169集

韮山城跡Ⅱ

平成17年度静岡県立韮山高等学校夜間照明施設工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成18年３月20日発行

編集・発行　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23―20
TEL 054―262―4261㈹　FAX 054―262―4266

印 刷 所　みどり美術印刷株式会社
〒410-0058 静岡県沼津市沼北町２丁目16番19号
TEL 055―921―1839㈹